

ね——設し——秘密に聞く事が出来るんなら——」

學士「え？」

夫人「——出来るんなら——世間の——とても書物や何かでは、諒解らん事を——」

學士「諒解らん事つて」

夫人「ほら、人にも聞けないし、又聞いちや悪るい事をね」

學士「——ぢや、夫で？」

夫人「夫もなの——まあ夫も一の理由だつたんでせうね。」

學士「世の中の快樂を究極うてい目的だつたんですな。ぢや、何故、もつと進んで、行らなかつたんでした？」

夫人「夫や、貴方が悪いんだもの——罪は貴方の方にあつたのよ——」

學士「——だつて、だつて、貴方が止めちやつたんだもの。」

夫人「夫や左様でしたとも——大分、何だか雲脚が險難になつて来て、御互の關係が眞物になりさうな鹽梅でしたもの。」

貴方よくまあ、極が悪くなかつた事ね——あの私が何にも知らんから好機と思つて——眞實に親友だと思つて安心し居つたら——まあ如何でせう！——私を何しやうとして——實に可疾しかつたわ——！」

學士（手を振つ）「あゝ！彼時、何故眞面目に僕の云ふことを——聽て呉れなかつたんでした——で、なければ、彼時、何故、貴方の思通りに、僕を銃殺て了んかつたんでした？」

夫人「——何故？——騒動が起るのが——嫌なばかりに」

學士「ふむ！僕の平常云ふ通り、貴方は胸奥は大臆病者なんだ。」

夫人「眞實以て、大臆病者なのよ。(調子を改めて。)でも彼時眞實に銃殺て了はんかつたのが、貴方に取つちや大僥倖だつたのよ。——ね、其の御蔭で、今ちやエルブステッドの御新造てい、大事な、可愛い婦人が認つかつたんぢやありませんか。」

學士「あゝ、彼女が全狀、談話をして丁つたんだな。」

夫人「さうして、屹度貴方も彼女に、二人の關係の事を饒舌て丁つたんでせう！」

學士「否、只一言も云はん！彼女はね、左様云ふ風な事には、極めて御目出度と來て居るんだから——」

夫人「御目出度の？——實際に——？」

學士「えゝ、左様云ふ風の事に就いちや、極めて淡泊に出來て居るんさ——」

夫人「——私や又極めて臆病に出來て居るんですね！(學士の面を避て、すつと、其傍へ憑れる様に倚添ひ、極めて低き調子にて。)宜うムんすか、私は今貴方に、一つ秘密を御話するから——」

學士(熱心に問たげなる面持して)「え？」

夫人「——何時、彼時、私が銃殺て了はんかつたと云ふのわね——」

學士「夫は？」

夫人「——何も彼晩、私が馬鹿に臆病の所爲ぢやなかつたん

です——」

學士（暫時、夫人の面を凝視して居たりしが、やがて、其の意中を會せしにや、靜に頷きて、情を含みし音聲もて細語く。）「あゝ！——やつと今、御互の交際の奥底に潜んで居た秘密な理由が、明白と諒解つた！すりや、矢張、男子を欲する女子の——」

夫人（鋭としたる面持して、徐に）「——しいつ！氣を注げて物を被仰い！——飛んでもない事を！——決して決して、其様下らん事を想像して居ちや、嫌ですよ——！」

夫人（ハタと寫眞帖を閉し、微笑つゝ、聲高に）「あゝ、やつとの事で、さあ直に、此室へ被入いよ」

検事の妻、廊下の戸口より入り来る。晴衣裳。下婢戸を閉めて去る。

夫人（長椅子に坐したるまゝ、手を差延べ）「實際に先刻から、何の位、待て居たか知れやしませんよ。」

この夫人の言葉の間、検事の妻は、背後の室なる、主人及び判事と一つ二つ挨拶を交し、夫より、卓の傍に近づきて、夫人と握手す。學士は立上る。學士と検事の妻とは、無言にて領合ふ。

検事の妻「一寸、私、彼室へ行って、御主人の御相手をしなくつても宜くつて？」

夫人「否。決して。彼人達は、彼人達で、あゝやつて御置きなさいよ、今直に出懸るんですから——」

検事の妻「おや、御出懸になるの？」

夫人「え、呑に行くのよ。」

検事の妻（忙しく學士に向ひて）「あの——貴方は被行るんぢやありませんまいね。」

學士「無論。僕が行かん！」

夫人「一寸、學士は御留になるのよ。」

検事の妻（椅子を學士の傍に据ゑ、之に坐せんとして）「あゝ眞實に、此方は結構ね——」

夫人「御言葉で痛入りますね。おほ、一寸、一寸、其處へ坐ちや不可い事よ。貴方は私の傍へ坐るのよ。ね、私は貴方方二人の間へ、斯う坐るんです。」

検事の妻「はあ、私や何處でも、貴方の好い様に——」

検事の妻は卓を廻ぐりて、夫人に隣りて、長椅子に座を占む。學士は復び原の椅子に坐す。

學士（暫時の後、夫人に向ひて）「え、奥さん、何うです、斯う坐て居る所を見ると、エルヴステッドの御新造は、可憐ぢやありませんか」

夫人（頭髪を搔ながら）「只看たところばかり？——おほ、貴方は御世辭が無い事ね！」

學士「え、左様です。何故つて、我々は——エルヴステッドの奥さんと僕とは、眞實の意味での、親友なんですから、別に御互同士の中で、世間向きの世辭を云ふ必要は無いんです。だから、二人で著作を爲ながら、何も遠慮なく、思ふ事を云ひ合ふんです。」

夫人「ぢや、例の秘密抜きで？」

學士「其りや——」

検事の妻（夫人に倚添ひ、柔さしく）「ね、斯様通り、私や實際幸福なんです——學士の云ふにや、——私が學士を激勵鼓舞したんですつて。」

夫人（微笑て、検事の妻を視やり）「おやまあ！學士が左様事を云ふの？」

學士「奥さん、夫のみならず、此婦人は、實際の所業に於いて、立派な斷決心を所持て居るんです。」

検事の妻「まあ！——私が——其様勇氣をですつて？」

學士「左様。非常な勇氣をさ——親友の身上に關した事にや——」

夫人「へえ！勇氣をね——へえ！——あゝ、夫さへ、所有んなら——」

學士「えゝ？あつたら、如何するんですつて？」

夫人「えゝ、其の勇氣がありさへすりや、人の一生は多分具

合の好様に、行くでせうと思つてね。（俄然、調子を改め、

検事の妻に向ひ。）——まあ、夫は夫として置いて、御前さ

ん、御附合に、一杯冷たいボンチをお飲んなさいよ——」

検事の妻「有難う。切角ですが、私は御酒類は、一向に不重

寶でムいますから——」

夫人「ぢや、貴方丈でも召飲れよ——」

學士「有難う。僕も頂戴しません——」

検事の妻「左様、左様、學士も決して飲らんです。」

夫人（學士の面を凝と注視し）「だつて——私が御勸めするん

だから——」

學士「否、何人の御言葉でも——頂戴しません——」

夫人（態と笑を含みて）「おや、おや、私やもう、貴方に向つ

ては、更に、効力が無いのねえ——」

學士「左様です。斯様云ふ事に就いらやね——」

夫人「まあ冗談は冗談として措いて、ねえ、眞面目に貴方召

飲れよ——よう御自分の爲だからさ——」

檢事の妻「一寸、一寸——不可せんつてば——！」

學士「何故——何が僕自身の爲ですつて？」

夫人「——でなけりや——他人の爲になるんですからさ——」

學士「へえ——？」

夫人「ね、ほら、一杯も飲らないと、世間ぢや、屹度想ふん

です——貴方は未だ、御自身では、十分に堅固ぢや無いと

思つて被居るつて——未だ十分に御自身で安心して被居ら

ないと——」

檢事の妻（傍白）「あゝ、其様事を云つちや——」

學士「いや、御忠告は有難いが、——縦令、人が何と云ふとも、

又世間で何と想ふとも、僕は、當分は、云ふ人の勝手にさ

して措く許りです。」

檢事の妻「左様ですとも、ね、當方さへ堅固くして居りや——」

夫人「——ふむ、私や、只今、判事さんの目付きで諒解つた

のよ——」

學士「諒解つたつて——夫や何が——？」

夫人「何がつて、嘲笑つたでせう——ほら、貴方が彼方の座敷へ、可怕つて御出でなさらんかつた時に。」

學士「何？僕が可怕つて、行かんかつたつて？——ふむ、僕は此室に留つて、貴方の御話を伺て居たかつたからさ——」

検事の妻「夫や無論、左様ですわねえ——」

夫人「だつて——だつて、判事さんは、左様云ふ、貴方の御

心持を知らんでせう。ね、ほら、彼人が主人を見て一寸、

不好きな、いけすかない、人を馬鹿にした様な笑顔をしたで

せう。ほら、貴方が判事さん許の夕御飯に御出でなさらん

てた時に——」

學士「行かんのは、僕が可怕と思ふからですつて？——奥さ

ん！貴方左様被仰るんですか？」

夫人「一寸、私や、其様事を云やしませんよ——多分、判事

さんは左様想つたんでせう——」

學士「——左様想ふんなら、勝手に想はせる許りです——」

夫人「ぢや、貴方は如何しても、一緒に被行しやらないの？」

學士「え、僕は勝手の様ですが、此家に留りませう。」

検事の妻「え、左様なさい。——（夫人に向ひて）貴方、夫

が一番宜い事よ。」

夫人（微晒み、學士に向ひ頷づきて）「私や、熟々感心したわ

！眞實に堅固くお成りなのね——不斷左様じや、宛然性質

にお成りのね。然し主義としては無論左様なきやなりません

まい。（検事の妻に向ひ、其脊を撫で）ね、私、今朝、左様

云つたでせう——あの貴方、大層心配して御出でだつたけれど——」

學士（立上りて）「心配をして——！」

検事の妻（驚愕して）「あの——後生ですから——後生ですから、其様事を——」

夫人「ほら御覽なさいな！ 貴方、もうく、彼様無益ん心配をする必要はありませんよ。（急に口を噤みて）さ、これから、愉快に、三人で夕御飯を喰べませうよ。」

學士（氣色ばみて）「あゝ——！ 奥さん、貴方の今被仰つた事は、一體、何う云ふ意味なんです？」

検事の妻「あゝ奥さん！——貴方何を被仰るんです——何をなさる——あゝ大變——」

夫人「静におしなさいつてば！——一寸、あの、いけ不好きな判事の奴が、彼室から貴方の方をじろく注目て居る事よ——」

學士「非常に心配をして——僕の爲に——？」

検事の妻（愁しき聲にて、忍びやかに）「あゝ、私を——此様に苦るしめて——」

學士（暫時の間、検事の妻の面を凝視して居たりしが、やがて、怒を帯びて）「あゝ、何だ、夫程、僕の身上を——改心を疑て居たのは、何者だ、僕の親友だつたんか！——夫程に僕を信んせんのか——！」

検事の妻「貴方！ 怒らないで——何卒後生ですから——静にして——私の云ふ事を——」



學士（満々と注げる酒杯を探り、之を高く差上げ、嘔れたる音調にて、検事の妻に向ひ）「おい、君の健康を祝すよ！」  
一息に呑乾し、又他の杯を採上ぐ。

検事の妻（静に）「奥さん——貴方——貴方其様事を被爲るなんて——黙て見て居らつしやらないで——留めて——留めて下さいつてば——」

夫人「私がさせるんですつて？ 私が？ 貴方氣でも違やしないの？！」

學士（又酒杯を差上げて、夫人に向ひ）「今度は貴方の健康を祝しますよ。よく眞實の事を話して下さい！」

又一氣に呑乾し、猶之に酒を注がんとす。

夫人（學士の腕に手を懸け、之を抑へ）「もうく澤山ですつ

てば！——ね、今はね。——ほら今夜、これから皆と一緒に  
行んでせう？」

検事の妻「又其様！ 不可ませんてば——決して、不可  
ませんてば——」

夫人「しいつ！ 静に御爲なさいよ！ 彼室で、貴方の方を凝と  
見て居るぢやありませんか——氣をお注げなさいよ！」

學士（酒杯を遠ざけ、検事の妻に向ひて）「おい、さあ眞實の  
事を白状した。」

検事の妻「はい——」

學士「おい、あの御前の——貴方の旦那は御前さんが僕の後  
を逐て、出て来た事を知て居るんか——え？」

検事の妻（手を振りて）「しいつ——しいつ——お——」

其様事を——何てい事を——あゝ私如何したら宜いだらう  
！

學士「え、おい。何かい？ぢや、御前さんと旦那と相談して  
それで、御前さんを此市へ遣して、僕を探させたんか——  
えゝ？あゝ、屹度検事が心配をして、御前さんを遣したん  
だね——検事め、又僕に役所の仕事を補助せやうと思つて  
——でなきや骨牌の相手が無いもんだから——」

検事の妻（悲しげに、呻吟て）「其様——其様——事を——如  
何してまあ——」

學士（手疾く酒杯を探上げ、之に酒を注がんとす）「うゝい！  
あの毫碌検事の健康を祝すせ——！」

夫人（酒を注がせずして）「一寸。もう澤山ですよ！ね、今夜、

一緒に持つて、主人にほら先刻の原稿を讀で聞せるんです  
からね——」

學士（静肅になり、酒杯を押避け検事の妻に向ひ）「おい、許  
して呉れ——一體、僕は、まあ、如何したんだ。此様風に  
腹を立てるなんて——何卒氣を悪くせんで呉れ——何卒  
寛恕して呉れ。ね、縦令、一度は墮落したつたつて、御前  
の力で又改心したんだから」

検事の妻（喜悅の色に輝きて）「あゝ、神様！有難うムいます  
！」

この時、判事は懐中時計を出だして看、主人と共に立上り、  
前の室に入り來たる。

判事（帽子と外套を取上げ）「や、奥さん、御馳走さま。食立

にします。

夫人「何う致しまして。澤山御愉快を——」

學士「立上りて、判事に向ひ」「ぢや、僕も御一緒に——」

検事の妻「愁氣なる聲して、密語く」「一寸、行くんぢやあり

ませんよ——！」

夫人「(検事の妻の腕を抓る)」「しいつー聞えるつてば！」

検事の妻「(腕の痛に不意聲を上げて)」「あいた——！」

學士「判事に向ひて)」「何うでせう——先刻の御言葉に甘へて

——御伴をしちや——」

判事「結構！御出になるかね——」

學士「何卒、願ひます。」

判事「勿論でがす。大出来、大出来。實に愉快ぢやとわせん

か。」

學士「(外套の隠の裡へ、携へ來たりし原稿を入れながら主人

に向ひて)」「え、君、この書物を出梓す前に、一二點、君の

意見を訊きたい所があるからね——」

主人「君、左様かい——名譽だ——(夫人に向ひて)だがおい、

誰かエルヴステッドの奥さんを送り上げる人があるかい？」

夫人「あ、其様事は心配なさらんくつても宜い事よ。何と

かしますから」

學士「(夫人と検事の妻とに向ひ)」「エルヴステッドの奥さん？

夫や、無論、僕が迎に來ます。(検事の妻に近づきて)如何

です十時頃じや——え？」

夫人「え、結構！」

主人「ちや、其事も好しと——だが、おい、僕は左様早くは  
歸宅らんよ。」

夫人「え、何時迄も何時迄でも居らつしやい——」

検事の妻（胸中の痛苦を抑へて）「貴方！貴方の御出で迄、屹  
度、此家で御待ち申して居りますよ——」

學士（帽子を持ちて）「無論です。」

判事「ちや諸君。目出度、出陣しやせうかな。ね、ある別嬪  
の被仰つた様に、出来る丈、愉快に行らうちやごわせんか。」

夫人「あゝ、其別嬪が密と、見えない様に、行て見たいわね  
——」

判事「何故、見えない様に？」

夫人「何故つて？赤裸の亂痴氣が拜見したいんですもの。」

判事（笑ひて）「いや怪しからん！拙者は何處迄も、其別嬪に  
御止しなさいと忠告するよ。」

主人（同じく、笑ひて）「や、之は宜い、いゝ氣味だ。」

判事「ちや、左様なら、おとなにお留守をするんですよ。」

學士（立出でながら）「ちや、十時頃、迎に來ますから——」

判事、學士及び主人は廊下の戸口より立出る。同時に下婢  
は、點火する洋燈を携へ、背後の室より入り來たり、洋燈を  
中央の卓の上に置き、復び背後の室を通り抜けて出する。

検事の妻（立上り、落付かぬ態度にて、座敷の裡をあららこ  
ちらと歩きながら）「奥さん——あの——あの——今夜はま

あ如何事になるんでせうね——？」

夫人「些も心配する事なんか、ありやしませんつたら！十時

にや、屹度迎に來ますよ——眞實にもう目に見える様だね  
——ほら葡萄の葉を頭へ載せて——おほ——眞紅になつて——おほ——大威張でさあ——」

検事の妻「え、設し其様事にでもなつたら——！」

夫人「さうして、そら、左様云ふ風になると、學士も又以前の性來に還るんです——もう、何處かの可憐い婦人の恐痴から離れちやつて——全然獨立の人になるんですよ。」

検事の妻「あ、！」

夫人「屹度、左様云ふ風になつて還て來ますから——（立上り、検事の妻に近づきて）夫りや、御前さんの勝手に人の云ふ言を疑ふ分にや、些も差支は無いけれど、私は屹度、私の云ふ通りだと思て居るんですよ——まあ見て居て御覺、今

に諒解るから——」

検事の妻「——私、貴方が可怕くつてよ——貴方は何だか氣味が悪い事ね——」

夫人「え、左様でせうとも。ね、私や只一度で宜いから生涯の中、人間一疋の運をば、自分の自由に——思ふ通りにして見たいわ——」

検事の妻「だつて——だつて、もう、度々行つたんでせう——？」

夫人「所が未だ、一度も——只一度も——」

検事の妻「ですけれど——あの御主人は？」

夫人「あ、！主人のさへ、其様事をしやうと思ふと、夫こそ大變な手数が懸りまさあ——貴方未だ知らないんだもの

——私や大變な貧亡人よ——さうして、貴方は又黄白を澤山所持て御居でなんだもの（情に激して、雙手もて検事の妻を懐き）私、眞實に貴方の頭髪を引抜いて仕舞ふから宜い——！

検事の妻「あゝ、離して——寛忍してよ——寛忍して下さ——  
——おゝ私可怕いから——」

下婢（廊下の戸口にて）「もし、奥様、食堂へ夕御食の御仕度が出来ました。」

夫人「あゝ左様かい。今行くよ。」

検事の妻「いゝえ、私お暇するわ——澤山、澤山——私、單

獨で御暇しますよ——」

夫人「冗談御云ひなさるなよ！まあ黙て夕御食を先へ御付合

なさいよ。眞實に貴方は馬鹿ね——それから、ほら十時になると——貴方の大事な親友が、葡萄の葉を頭へ載せて、千鳥足でやつて来るぢやありませんか！  
夫人は殆んど、魔力もて無理強ひに、嫌がる検事の妻を、食堂へと連れ行く。（幕）

三幕目 主人の住居

廊下の出入口及び玻璃戸は、窓帷もて掩はれてあり。卓の上には、蓋を掛けたる洋燈の微けき光を放つ。暖爐の蓋は開かれしまゝにて、殆んど消えなむとする埋火の、昨夜の名残を留めてあり。

検事の妻は幅廣き肩掛を纏ひ、暖爐の傍なる肱掛椅子に深く躰軀を下し其雙脚を脚踏凳の上に置く。夫人は昨宵の儘なる晴衣にて、毛布を被ひて長椅子の上に熟睡しつゝあり。

検事の妻（幕開きての後、暫時して、忙はしく坐り直ほし、心を注げて、何事をか聴取らむとする科をなす。やがて復さも物憂げに、以前の如く椅子に躰軀を深く靠せ、密びやかに獨語つ）「あゝ！今迄たつても！今迄待て居ても——誰も未だ歸宅て來ない——！」

下婢拔足して、極めて秘びやかに、廊下口より入り來たる。手に一通の手紙を携ふ。

検事の妻（振顧りて、判然としたる調子にて細語く）「え、誰か來て？」

下婢（靜に）「はい。只今少女が此お手紙を持って參りました。」

検事の妻（急はしく手を差出して）「え、手紙？拜見。」

下婢「あのお手紙は旦那様の所へ參たんで御座います。」

検事の妻「あゝ！」

下婢「貴方、お手紙は旦那様の伯母様の所から參たんで御座います。卓の上へ置きますから。」

検事の妻「え、左様して置いて下さい。」

下婢（卓の上へ手紙を置く）「貴方、洋燈はもう消して宜敷う御座いませう、燻るばかりで御座いますから。」

検事の妻「あゝ、何うぞ左様して下さい。もう直に明るくなるでせうから。」

下婢（洋燈を消して）「えッ、もう全然明るくなつて居るんで

御座います。」

検事の妻「あゝ、全然もう明けちやつて——と云ふのに未  
だお歸宅にならないんですかねえ——」

下婢「ねえ、貴方、私は昨宵的確、斯様な事と想つて居た  
んで御座いますよ。」

検事の妻「何故？何うして？」

下婢「えゝ、左様私は想つたんで御座います——あのほら——  
—あの方が此市へ復還つて被入して、さうして皆さんと一  
緒に御出掛になつたんですもの。えゝもう、あの方に付ち  
や、是迄種々風評があつたんで御座いますもの。」

検事の妻「一寸、一寸、其様大きい聲をしちや不可い事よ！

お前さん、奥さんを覺醒して仕舞ふわ！」

下婢（長椅子の方を見やり。吐息して）「まあ、眞實に熱く安  
眠して上たう御座います。あの貴方、冷ますから、暖爐を  
焚きませうか？」

検事の妻「否、有難、私は澤山よ。」

下婢「ぢや、もう少し御休息なさいまし。」

下婢は密びやかに、廊下口より出で去る。

夫人（下婢の廊下の戸を閉せし響に目を醒し、仰になりて）

「おや、何？」

検事の妻「何でもないんです——今女中衆が一寸——」

夫人（四圍を見廻し）「あゝ！此室へ這入て來たの？——現に  
覺へて居るわ。（長椅子の上に起直り、雙腕を擴げ、眼を磨  
る）「一寸、今何時？」



検事の妻 (懐中時計を開き見て) 「丁度七時半です。」

夫人 「さうして主人ちや何時帰宅て来たの？」

検事の妻 「あゝ！ 未だ帰宅て被入しやらないんです！」

夫人 「あの未だ帰宅て来ないんですつて？」

検事の妻 (立上りて) 「えゝ、あの未だ何方も！」

夫人 「まあ！ 夫れだつていのに、お互に此室にぼつねんと坐

て居て、まじ、く、と四時過ぎ迄待てるなんて——實際に馬

鹿々々しいわ！」

検事の妻 (雙手を打振りつゝ) 「貴方！ 私は何の位心配して、

あの人の歸つて来るのを待て居つたか知れやしません！」

夫人 (數回、欠呻して後、手を以て口を掩ひつゝ) 「あゝ、馬

鹿々々しい！——早く寢て仕舞やよかつた事ね！」

検事の妻 「貴方、少しはお睡れて？」

夫人 「えゝ、寢ましたとも、熟と睡ましたわ。貴方は？」

検事の妻 「私？ 私何うしたつて眠られやしません！」

夫人 (立上り、検事の妻に近づきて) 「おほゝゝ。貴方何も

其様に心配する事はありやしないわ。私にやよく諒解て居

てよ——彼の人達が昨宵何事をしたてい事をさ——」

検事の妻 「まあ何事を？——聞せて下さい——」

夫人 「そりや、無論まあ判事さん許で、亂痴氣騒をやつたん

ですわね。」

検事の妻 「あゝ、やつたんでせうね——ですけれど——」

夫人 「ね、だから、主人ちや、夜中に歸つて来て、皆を覺醒

すのを遠慮したんでさあね (晒出して) 夫にや、千鳥足の

ふらふら機嫌悪い所を見せるのを少しは面目ないとも思つたんでせうよ。」

検事の妻「さうしてまあ御主人は何處へ被入したんでせう？」

夫人「主人ですか？主人は無論、伯母許へ行たんです。さうして未だ眠て居るんでせうよ——伯母許には未だ主人の部屋だつて、別に一間とつてあるさうですから。」

検事の妻「否、伯母様許ぢや御坐んすまいよ。只今お手紙が

——あの伯母様許から参りましたもの、ほら彼處に。」

夫人「眞實？（手紙を取上げ、封筒を視る）眞にねえ、伯母さんの手蹟だわ。ぢや、屹度判事さん許で夜明をしたんでせうよ。さうして、ほら學士は葡萄の葉を頭へ載せて、例の書物ていのを讀んで聞かせたんでせう。」

検事の妻「あゝ！奥さん！貴方は其様事を口では被仰るけれど、御胸中ぢや些とも眞實とは想つて被居しやらないんでせう。」

夫人「おほ、貴方は實際に少し砂糖屋さんね！」

検事の妻「え、私は何うせ甘いんでせうけれど——」

夫人「さうして、貴方は大變に疲勞て居る様よ。」

検事の妻「え、もう全然落膽して仕舞つたんです！」

夫人「ぢや私の云ふ通になさい。私の室へ行つて、床の裡へ這入て、少時間横臥におんななさいよ。」

検事の妻「否、可いんです、可いんですよ——横臥になつても、とても眠れやあしませんから！」

夫人「眞實に眠られるつてえは——」

検事の妻「ですけれど、屹度旦那様が直に御歸宅になるでせうから——お目に懸つてお話しを伺ひたいと存じますから——」

夫人「歸宅つたら直に知らせて上げますよ。」

検事の妻「貴方、屹度ですか？」

夫人「屹度——屹度ですとも。さ、早く行つて、其迄御休息なさい。」

検事の妻「有難。ちや少しの間、横臥になりますから。」

検事の妻は背後の室を通りて出で去る。夫人は玻璃戸を掩へる窓帷を引絞る。日光玻璃戸を透して室内に映射す。夫人は小き卓の上なる小さき鏡を採上げ、寝腐髪を修飾ふ。夫より廊下に備へある電鈴を鳴らして下婢を呼ぶ。間もな

く下婢戸口にあらはる。

下婢「はい。お召で御座いますか？」

夫人「あゝ、後生だから、早く暖爐へ火を起しておくれ、寒くつて寒くつて凍えつちまふやうだから！」

下婢「はい、直ぐに起します。(下婢は餘爐を掻集め、其上へ新しき薪木を加ふ) おや、御立關の電鈴が鳴ります。」

夫人「茲は可いから、早く行て御覽。可いよ、私が焚付けるから。」

下婢「はいお火は直ぐに起ります。」

下婢は廊下口より出で去る。夫人は足踏凳の上に跪つき、暖爐の裡へ若干の薪木を入れる。暫時ありて主人廊下口より入來る。顔色頗る疲勞せし様子。平常に似氣なく、眞面

目なる態度、拔足して戸口に近づき、音せぬ様に窓帷の間  
ひより入らむとす。

夫人（猶、暖爐の傍にありて、火を起さむと努つゝ、仰見す  
して）「お還んなさい。御機嫌よう！」

主人（振顧りて）「おや！（夫人に近づきて）ま、何うしたん  
だ、此様に早く起きて——え？」

夫人「はあ、私、今朝は滅法早く起床たんです。」

主人「驚いたねえ！僕は屹度お前は未だ白川夜船の最中だと  
想つて居たんだ。」

夫人「しいつ！其様な大きな聲をしちや不可せんつてば！  
貴方、あの検事の妻君が私の部屋に横臥になつて居るん  
すから。」

主人「え、ちや何かい、検事の奥さんは昨夜宿泊つたのか  
？」

夫人「えゝ、だつて、誰も迎に來ないちやありませんか！」

主人「左様、成程、誰も來んだつたらう！」

夫人（暖爐の蓋を閉め、立上る）「時に、昨夜は何うでした、

面白くつて？」

主人「あの——僕の事を——心配して居たかい——え？」

夫人「否、夢にも心配なんぞするものですか、只私の伺つた  
のは、昨夜は面白かつたかてい事なんですよ？」

主人「あゝ、一時は可成愉快だつたんさ。けれども、其は始  
の中の事さ。——あの學士が僕に例の書物を讀んで聞かし  
て呉れてる間は——實は少し早く行つたもんだから。其れ

に、判事さんは、未だ種々御馳走の仕度をしなくつちやならんもんだから。で其間、學士が例のを讀んで聴かして呉れたんさ。所がだ——」

夫人「へえ、夫から？」

主人（暖爐の側なる、土耳其氈もて製せし腰掛に坐す）「所がだ、——え、とても御前想像なんて——着きやせん位な話だよ——眞實におまけでも何でもなく、近世の大著述だよ——え、何うだい——」

夫人「ふん、何うだいって、私些とも拘やしないわ！」

主人「え、可いかい、僕は御前に一つ白状する事がある。實はね、學士が讀了やつた時にや實に何とも云へん様な不快な心持がしたんだ！」

夫人「不快な心持が——？」  
主人「實は兀然と聴て居つたさ、が、胸中ぢや、あゝ學士は何うして、此様偉大い事が書けるかと想つて、つくづく羨ましくなつたんさ——あゝ、自分ながら愛想が盡きちやつた——！」

夫人「諒解てよ——諒會てよ——無理は無いんです！」

主人「所が御聴きよ、其様な偉い學力を持つてながら、學士はとても眞人間にやなれんね！」

夫人「——ていのは、所詮學士は他の人よりも、世の中の生活慾にかけちや、卑怯ぢやない——大膽だつてい事てせう？」

主人「大膽?! 大膽だか瓢箪だか知らんけれど、飲酒事にかけて

ちや、いやはや、制限も何もありません！」

夫人「夫から何うしました？」

主人「何うしたつてしないつて、結局狸々は亂舞と御座いっさー！」

夫人「あの葡萄の葉を頭へ載せて？」

主人「葡萄の葉？僕は其様物は氣が着かんかつた。だが、學士は例の書物を書くに付いて、學士を鼓舞激勵たつてい、

ある婦人に關つて、滅法長い、狂氣染た演説をやつたせ！」

夫人「さうして、其婦人の姓名を云ひましたか？」

主人「否、云はんかつた——が、僕の想像だと多分檢事の

妻君だらうと思ふんだが——え、何う云ふもんだらう！」

夫人「さうして、貴方は何處で、學士と分袂たんです？」

主人「左様、歸路の途中だつた。我々は一番最終迄残つた連

中と一緒に判事の家を出たんさ——判事さんも、少し運動

をしようつて、我々と一緒に出懸たのさ。何しろ、學士は

話した通りで、到底單獨歩行は出来んてい有様なんだから、

衆人して下宿へ送つてやらうてい事にしたんだ。」

夫人「其様に泥酔らつて了まつたの？」

主人「うむ、可いかい。之から一大恨事——いやはや、氣の

氣千萬な次第に立到つたんだ。實は學士の面目から云ふと、

僕は御前に話をするんでさえも、憚る位な、怪有ん、不體

裁な事なんだか——」

夫人「へえ、——一體まあ——」

主人「今話した様にね、最後に留つた連中と一緒に還つて來

た途中で、僕は一寸一步、皆から背後になつたんさ——何  
眞の數歩だつたけれど——」

夫人「さうすると？——え、何うしたの？」

主人「所で、僕は衆人に逐着かうと急いで行くと、往來端で、

おいお前まあ、何が落ちて居たと想ふ？」

夫人「何つて——私にや見當が着きやしませんわ。」

主人「え、可い可い、決して御前、誰にも話ちや不可んよ——

え、可い可い？——ね、學士の爲だから（と云ひながら

隠より小さき包を取出し）え、何うだい——之包が落ちて

居たんさ！」

夫人「おや！之れは昨日學士の持つて來た包ちやないんです

か？」

主人「其さ！學士に取つちや生命より大切な、二度と再び取

返しの付かん位大切な原稿なんさ。——まあ何うだらう——

其程大切な物を遺却て了つて、さつぱり氣が着かんなん

て！——實に呆て了まうぢやないか！」

夫人「ですけれど、貴方、何故其時、之を還しておやんなさ

らないの？」

主人「何うして何うして、學士の體裁ぢや、劍難で劍難で、

とても其様事は出來んぢやないか！」

夫人「一寸、貴方、此事を他の方に御話なすつて？——あの

——此包を御拾ひなすつたてい事を？」

主人「おい、冗談云つちや不可んよ！誰に話すものか——學

士の面目に拘るぢやないか！」

夫人「ぢや、何です、貴方が此包を持って被居るてい事は誰も知らないんですね？」

主人「無論さ——又實に他人にや知らせたくない話だ！」

夫人「さうして——貴方、之を拾つてから後、何か學士に被仰つて？」

主人「否、學士とは一言も話す機會が無つたんさ——丁度廣い街衢へ出た時に、學士と他に一人二人見えなくなつちやつたんさ——驚いたね！」

夫人「あゝ！ぢや其連が屹度下宿へ送つて行たんでせう？」

主人「あゝ、屹度左様なんだらう。それから、判事さんも家へ歸へつちやつたんさ。」

夫人「さうして、貴方は又た其後、何處を喧ぎ廻つて居たん

です？」

主人「うむ、僕はね、衆人と一緒に、或る友達の許へ飛込んで、曉のコオフイてい奴を飲んだのさ——眞實の事を云ふと、夜中のコオフイてい方が適當かも知れんて。——所で僕も一休息して、丁度學士が熟然一睡眠した時分を見て、學士の許へ之を持ってつてやらんけりや——」

夫人（手を差延して包を取らんとす）「馬鹿な！冗談被仰るなよ！包を放棄しちや不可ませんよ——目下ね——まあ私が

一應讀了す迄は——」

主人「いや、其様事は出来ん、其様無茶な事は出来んぢやないか。」

夫人「出来ない？！貴方にや出来ないの？」



主人「出来るの出来るのつて——まあ想像でも御覧——何様に學士は失望するか知れんせ！ほら覺醒てから、原稿が紛失して居るのに氣が着くと——昨宵の話だと學士は原稿切きやア持つて居らんのださうだ——他に寫は無いんださうだ！」

夫人（疑と主人の面を鋭く視やり）「すると、學士はこの原稿の様な物は、二度と再び書く事は出来るのですか知らん？え、もう一度？」

主人「何うも、到底出来たらうと思ふね——何故つて、そら其の——ある婦人の鼓舞奨励ていものは——」

夫人「成程、其れは左様ですわね——（何氣無き振して）「一寸、私一向失念て居たわ——茲に手紙が一本來て居ますよ。」

主人「え、何處から？」

夫人（手紙を取りて主人に渡す）「今朝早く來たんです。」

主人「やあ伯母さんからだ！一體まあ何の要だらう？（携へし原稿の包を傍なる椅子の上に置き、手紙を開き、急がはしく黙讀するや否や跳上る）「大變！——おい、おい少叔母さんが臨終いとさ！」

夫人「貴方、大變だつて、叔母さんの死期近いてい事は、もうちやんと、解つてる事ちやありませんか？」

主人「何しろ、息のある中に會ふていには、是から直ぐに出懸なけりや——大至急で行て來るよ。」

夫人（微笑を抑へて）「其様に急がなけりやならんのですか？」

主人「あゝ、御前何卒心を取改して僕と一緒に來て呉れる譯

にや行かんか——え、後生だ！」

夫人（立上り、さも煩さげに）「不可ませんつてば！左様出来  
ない相談なんぞ！私は天稟、死人や病人を看るのは大嫌！

——ですから、今後もある事ですが、私丈は一切左様云ふ  
醜惡物からは——縁切にして置いて頂戴！」

主人「ちや、仕方がない！——（一步、二歩あゆみて）おや

僕の帽子は——夫れから外套は？——左様だ、廊下にあつ  
たつけ——何しろ間に合へば宜いかなあ——」

夫人「其様なら、大至急で被入つしやい！」

下婢入り來たる

下婢「あの判事さんが被入しやいまして——あの參堂ても可  
いかつて——？」

主人「え、此様に早く？いや、己は出懸る所だから、御目に  
かゝれんつて——」

夫人「ですが、私は面會ても差支ない事よ。（下婢に向つて）此

方へ御案内してお呉れ。（下婢立去る、夫人は急がはしく囁  
やく）一寸、其包をさ——早くつて云へば——……」（夫人

は手早く原稿を奪ひとる。）

主人「おい、不可んてえば！——僕に御渡しよ！」

夫人「しいつ！沈黙て被居いよ——貴方が歸宅る迄、私が吃  
度御預りして置きますから。」

夫人は小卓に近づき、原稿の包を其上なる書棚の裡におし  
匿す。主人は少しく慍しものゝ如く、其爲意の如くに手套  
を填め得ずしてぶつくと呟く。判事廊下口より入り來る。

夫人（軽く頭を下げ）「御早やう。馬鹿に早いぢやありませんか？」

判事「うむ、早いでせう。（主人に向ひ）御出懸かね？」

主人「君、叔母が終臨いつて、知らせて来たから、何うしても出懸んけりや——何しろ一刻も猶豫出来んてい端目なんだから——」

判事「や、そりや御心配だらう——ぢや決して御關心なく出懸たまへ——」

主人「ぢや、失敬します。」

主人は急がはしく、廊下口より出で去る。

夫人（判事に近よりて）「昨夜は御賑てい所を超越して亂痴氣騒動だつた左様ですなえ？」

判事「御覧の如く私は昨夜以來未だ衣服も着更ん位さ。」

夫人「おや未だ？」

判事「ほら、全然昨夜の衣服でげす。所で主人は昨夜の轉末を全然御話しやしたか？」

夫人「え、だが、悉皆下らん事はかりですの——早曉に連と一緒にコオヒイを飲んだとかすべつたとかなんてい事はかりなんですもの——」

判事「左様、私も其のコオヒイ一件は聴きましたよ——だが學士は其伴侶ぢや無かつたんでせう？」

夫人「え、あの男は、他の連中が其以前に下宿へ送つて行つた左様です。」

判事「ぢや主人も一緒に送つて行つたの？」

夫人「いゝえ、主人は送つちや行かん左様でした」

判事「（にやりと晒ひて）「奥方！主人公は眞實に好人物だね！」

夫人「御世辭の無い處、實際ですなえ！然し……貴方の御

話の裡には何か意味がある様ね？」

判事「うむ、まあ多少あるんさ。」

夫人「え？眞實？まあ椅子へ懸けませうよ——さうして緩り

伺ひませう（夫人は卓の左側に坐を占む。判事は近く其隣

に坐す）すると、その秘密ていのは？」

判事「ね、奥さん、よく御聴きなさいよ——實は昨夜ね——

今曉てい方が適當かも知れんが——客の還る時に私は少し

理由があつて、一緒に附屬て行つたのさ——客の一组と一

緒に散歩せうつて出懸たんでげす——」

夫人「あの學士も其の伴侶？」

判事「白狀すると、學士も其の伴侶さ。」

夫人「さあ、私耐らなくなつて來たわ——さあ續を聴かして

頂戴よ！」

判事「所で、貴方は、學士と二三人の連中と昨夜徹夜をした

家を知つて居ますか？」

夫人「御話なすつても、又伺つても差支無い處なら、聴かし

て下さいな。」

判事「驚いたねえ——肩衣袴附の質問なんと來ちや——いや

公然と話をして差支無い所さ——滅法景氣の好い宅なんで

げす。」

夫人「其様繁盛な家なの？」

判事「此市中で一番繁盛な所でげす。」

夫人「へえ、其様して其から奈何したの？」

判事「まあ、御聴きなさいよ。御話は少し前後するが——學

士は昨夜御宅へ来る前に——多分二三日前の事でせうが——

其の景氣の好い家へ招待されたんです。私は少し理由が

あつて、始終其に就いちや熟知して居るんさ。だが、學士

は行かなくて謝絶ちやつたんさ——何故つて、全然改心

してていもんだから。」

夫人「其は檢事の家ぢや改心もしたでせうが——ね、同様其

處へ行つたんでせう？」

判事「其通りさ。何しろ、飛んだ事には、昨夜、私の許で全

然可い心持になつちやつた結果だもんだから——」

夫人「まあ、左様ですつてねえ！聴きましたよ——ほら大變  
に可い心持になつたんですつてね！」

判事「些と可い心持になり過ぎちやつたのさ。そこで、學士

量見を取直したもんと見える。奈何男子ていものは——秋

の空てい様に——變更てはならんのだが——變更やすいも

んでね——」

夫人「あゝ！ですけれど、貴方丈は特別ですわねえ——さう

して其後學士は何うしました？」

判事「其からね——え、先づ取摘んで御話をする——學

士は其のダイヤナてい別嬪の許で、もう一層可い心持にな

つたんでげす。」

夫人「ダイヤナ？一體其は何人なの？」

判事 「所詮、其の別嬪が招待をしたんでげす——男と女と混  
合な客を招んだんでげす。」

夫人 「其女ていのは紅い頭髪の人？」

判事 「其人、其人。」

夫人 「ちや、寄席へ出る唄歌者てい様な婦人？」

判事 「え、まあ其様云つた様な生活を爲て居るんでげす。

さうして其はまあ世間體の生活さ——生實本業ていのは大  
變な獵師なんで——そら男子計を目的て居るね——無論、  
其評判は御聽きな事があつたでしたらう。——學士は、其  
の五六年前の滅法景氣の可い時分にや、其女の特別付きの  
最負筋なんでげした。」

夫人 「さうして、結局、何うなつたんです——え？」

判事 「所が非常な争動が持上つたんです。其の紅頭髪の別嬪  
が始めの愛想に引返て、宛で夜叉見たやうになつちやつて  
ね——」

夫人 「あの學士に向つて？」

判事 「左様です。學士は、其婦人や婦人の朋友が學士の懐中  
物や、其他の品物を盗んだと云出してね、さあ夫から大亂  
暴を始めたんです。」

夫人 「夫から？」

判事 「夫から夫、男女混合の擲合、引搔合、——所詮、大活  
劇が起つたんでげす。然し宜い具合に巡査が來やしてね。」

夫人 「え巡査が來たの？」

判事 「え、來やしたのさ。所が夫れ、冗談から駒てい風に、

學士大變な目にあつたんでげす！」

夫人「何時、奈何して？」

判事「學士、既めんくらつちまつて、有心無心に、巡查に向つて抵抗を爲たもんと見えるんでげす。何でも、一人の巡查の耳傍を打撃て、それから官服を全然破毀て仕舞つた左様です、結果に、とう／＼捕縛られて、無理往生に警察へ連れて行かれたと云ふ顛末さ。」

夫人「貴方は何うして其顛末を御存知なの？」

判事「うん、悉皆警官から聴きやした。」

夫人「あゝ、とう／＼、其様事になつたんですかね。ぢや學士は葡萄の葉を頭へ載せて居なかつたの？」

判事「葡萄の葉？一體夫は何う云う理由で？」

夫人（調子を改めて）「ですけれども——ですけれども——一體、貴方はまあ何ういう理由で——夫様風に——探偵見た様に——學士の跡を附けたんです？」

判事「其理由ですか——夫や第一番には、何しろ私の家から還懸に起つた争動だからね、警察へ出ても萬更知らん顔も出來んものだから——」

夫人「ぢや、結局裁判沙汰になるんですか？」

判事「無論でげす。然しまあ奥様、何うならうと拘つたことぢや無いぢやござせんか。何しろ、私は御家の親友として此の一件をお話しせんぢや私の義務に缺けると思つてね——」

夫人「然し實際夫は何う云ふ理由で？」

判事 「何う云ふ理由かと云へば、學士は屹度貴方を利用して  
だしに使用やせんかと思つて、甚く心配で堪らんから——」  
夫人 「否ねえ！ですけれど、何故又學士は私を其様云ふ風に  
利用しやうとするんでせう？」

判事 「何故？（陰險なる晒様をなして）は、は、は、は！何故も  
無いもんだ、奥様！私は盲目ぢやごわせんせ。え、可うご  
すか、あの夫れ、檢事の案内、ね、あの婦人は悠々と此市  
に逗留して居るぢやごわせんか。」

夫人 「だつて、それや縦令あの兩人の間に何う云ふ關係かあ  
らうとも、何も此家に限つた譯はないぢやありませんか——  
何處だつて會合ふと思や會合るぢやありませんか？」

判事 「所が大相違！此市中で白儿帳面の家は何家でも、今日

つから學士に對しては門前拂でげす。」

夫人 「ぢや、家でも左様しなきや不可ないの？」

判事 「無論でげす。實際の處、學士が從來の様に御宅へ遠慮  
なしに出入をする事になると、私にとつちや不愉快處の騒  
ぢやごわせん！萬一學士が餘計な——それ何の——？」

夫人 「何の——？三角同盟の事？」

判事 「其通り！萬一夫に加盟する様な事にでもなつた日にや、  
私程凄慘な者はごわせんせ——だつて左様でもなる日にや、  
私は殆ど行く處も無い位な者さ？」

夫人 「ぢや、貴方の目的は、其同盟の盟主になるお心算？」

判事 「徐ろに領き、低き調子になりて」「天眼通！恐れ入つた  
ね！夫から可うごすか、私は其目的を遂ぐる爲にや、有ら



ん限りの力を盡して行る心算さ。

夫人（判事の言葉の終らぬ中に、面色険しくなる）「實際に貴方つてい方は畏しいのね——いざつてい事になると——」

判事「痛み入つたね——其御挨拶は！——併し其様風に見えますか？」

夫人「え、見えますわ！併し私眞實に嬉しい事にや、未だ貴方に尾を捕へられた事が無いから——」

判事（氣味悪るき笑を漂べて）「左様、左様、まあ御安心なさい。は、は、は、併しまあ御注意なさい——私は何事を爲るか知れんから——」

夫人「眞實に氣味が悪るいのね！だがまあ御聴なさいよ——貴方が其様事を被仰ると、何だか私を——恐迫して居るや

うに聴えますね——」

判事（立上りて）「飛んでも無い事！ね、可うですか、三角同盟は——そら自身から進んで結るやつでなくちやあ駄目ですからね——」

夫人「私の考へも其通りよ。」

判事「所で、先づ私の意衷も述べたと——ちやお暇しやうか——失敬します。」

玻璃戸の方へと行く。

夫人「貴方、後園の方から還るの？」

判事「え、近道ですから。」

夫人「左様ねえ。併し裏門ですわ！」

判事「其通り。裏門大結構。或る場合にや裏門の方が大に便

利でござすわ。」

夫人「左様ですとも。射的のお稽古でもして居る時は又格別ですわ。」

判事（戸口にて、晒出して）「は、は、は、併し誰だつて、まさかに自分許の飼鳥を撃つ様な無慈悲な人もござすまい！」  
夫人「夫りやありませんわ。おまけに只一羽しか居ないんですもの。」

夫人と判事とは意味あり氣に領合ひ、軽く挨拶す。判事は出で去る。夫人は玻璃戸を閉め、暫時其處に佇み、極めて眞面目なる面持して戸外を見やる。夫より、窓帷の傍に行き、それを啓きて、背後の室を見やる。やがて、書卓のほとりに進み、學士の原稿を入れたる包を取出し、之を開か

んとす。と、たんに下婢の聲けたましく廊下の彼方に聞ゆ。夫人は手早く、包を引出に入れ、錠を懸け、その鍵をインキ皿の上に置く。

學士、手に外套と帽子とを携へ、廊下の戸を荒らかに引開け入り來らむとす。頗る焦燥の態度。

學士（廊下の方を見て）「な、何が失敬だ………僕は是非面會んけりや——餘計な事を云ふな！」

學士は廊下の戸を閉め、座敷の方を振向く其拍子にはたと夫人と面を合す。直に平常の温和なる態度に復し、禮をなす。

夫人（書卓の傍に立つ）「おや、お迎にしちや大層遅刻ぢやありませんか？」

學士「いや、寧ろ早朝から御邪魔に上つた方でせう。何卒御許しを。」

夫人「貴方、何うして、彼方の未だ宅に御出での事を御承知なの？」

學士「實は今し方宿へ行つて尋問て見たら、昨夜は歸宅らん左様でしたから。」

夫人（卓の傍に進みて）「あの——貴方氣が注かなくつて——あの宿の人が、貴方が行つたら——變な顔色をしなくつて？」

學士（訝し氣に夫人の面を見やり）「あの僕が行つたら——變な顔色を——？」

夫人「——變な面持つて——そら——何とか——不思議に想

やしなくつて？」

學士（俄然其意を領して）「あゝ！會得つた！彼婦人の面皮迄潰ぶして了つて——！然し宿の人は別段氣も注かん様でした。時に主人ちや未だ寢て居るんですか？」

夫人「いゝえ、もう起床たでせうよ。」

學士「さうして、昨夜は何時頃歸宅て來ました？」

夫人「えゝと、何でも大層遅い様でしたよ。」

學士「何か話がありましたか？」

夫人「えゝ、判事さん許ぢや、大層面白かつた左様ですね。」

學士「——他に何か話しましたか？」

夫人「いゝえ、別段是と云つて他にや——何しろ私大變眠かつたもんでしたから——」

検事の妻背後の室より窓帷を啓て入来る。

検事の妻（學士に近づきて）「まあーやつと！」

學士「やつと來は來ましたが——もう遅刻過ぎます！」

検事の妻（心配氣に學士を見やり）「えー何がもう遅刻過ぎる

んですよ？」

學士「何がつて、一切手遅になつちやたんです——もう僕は

駄目です！」

検事の妻「貴方！其様馬鹿な——止して——止して——下さ

いよ！」

學士「いや貴方が昨夜の顛末を御聽きになつたら、同様左様

お云ひでせう！」

検事の妻「縱令、誰が何て云ふとも、私や眞實にはしやしま

せんよ。」

夫人「ねえ、一寸、何うです、御互に種々御談話もありませ

うから——あのお邪魔になるのも何だから、私や御免を蒙

つても——」

學士「否、何卒居て下さい——お願いしますから——」

夫人「——ですけれど、内緒の御談話を伺ふのは私好みませ

んから。」

學士「否、まあ聞いて下さい——僕のこれから御話するのは

決して昨夜の不仕末についてぢや無いんですから——」

検事の妻「ぢや、何事なんです？」

學士（検事の妻に向ひて）「僕のお話しやうていのは——實は

今日から、御互にお別離せんけりやならんと云ふ事です。」

アラブガ・ダへ

検事の妻「離別なけりやならんとは？」  
夫人（不意に口を挟みて）「私はよく其の理由を解領て居るわ

——」  
學士「——と云ふ理由は、今日から僕はもう貴方には要は無  
いんだから——」

検事の妻（愕然として）「え、何ですつて？ 貴方はよくまあ、  
静座して、平氣な顔をして、其様事が仰被れるもんですね  
！？あの私にもう要は無いつて？！一寸、貴方！私や從來の様  
に御用を達す事が出来ないんですか——御一緒に勉強して  
行く譯にや行かないんですか？」

學士「否、僕は斷然今日から勉強せんと決心したんです。」  
検事の妻（絶望の氣味にて）「ぢや——私は——私は一生何う

アラブガ・ダへ

したらん可いんです！」

學士「何卒——何卒、僕と懇意にならん舊日に復つて、其迄  
の様に生活して下さい！」

検事の妻「其様——其様無理な事ばかり——」

學士「何卒、まあ試つて見て下さい、さうして——如舊——  
御願しますから御宅へ歸つて下さい！」

検事の妻（感情激興し來りて）「貴方！私決して生きちや復歸  
りはしませんから、何處へ貴方が被行らうとも、え、可う  
御座んすか、私は屹度伴着て行きますから——私、其様云  
ふ風に棄物にされちや居ませんから！私、一寸だつて、貴  
方の傍は離れはしませんよ！——彼書物が出梓る迄は、何  
様事をしたつて、貴方の傍は離れはしませんから！」

夫人（傍白）「あゝ！あの書籍！——眞實に左様ですわ！」

學士（凝と夫人を視やり）「奥さん！書物と云へば——眞實彼

書物は僕とこの婦人との協力で出来たんです！」

検事の妻「其通りです！私實際左様信じて居るんです。です

から、彼書物が出梓る迄は、私は貴方のお傍に居る権利が

あるんです。貴方！私他に何も希望も願も無いんです。——

只々、彼書物が出梓て、世間から貴方が偉大評判と名譽

とを御得になるのを見たい許りなんです。さうして其時の

御歡喜を御一緒に爲たい許りなんです！」

學士「あゝ！彼書物は到底世間へ出梓つこは無いです！」

夫人「あゝ！」

検事の妻「え?!到底世間にや出梓ないんですつて?」

學士「左様です！到底駄目です！」

検事の妻（虫が知らせる心の焦躁に）「貴方！原稿を何うかな

すつて?」

夫人（良心の咎、躁々して學士を視やり）「え?原稿を何うし

て?」

検事の妻「何處へお遣りになつたの?」

學士「あゝ！何卒其文は聞かんで呉れ！」

検事の妻「いゝえ伺ひます！——私や伺ひます——伺つても

可い権利があるんです！」

學士「原稿か?原稿はね！あゝ左様だ、僕は寸断に破裂つて

了まつた！」

検事の妻「え?!眞實に?」

夫人 (不意も)「だつて——夫でも？」

學士 (夫人を看やり)「左様ぢや無いと云ふんですか？」

夫人 (心づきて)「あゝ、成程御自身で被仰るからには——ですけれど、何だか變なもんだから——」

學士「事實です！」

検事の妻 (手を振りて)「あゝ、神様！——奥さん！——あの大事な——大事な原稿を——自身で——破裂つちまうつて

！——」  
學士「僕は所詮、自分の生命を寸断に破裂つたんです——ですから、其の序手に僕の一生の仕事も又寸断に破裂つたのさ——」

検事の妻「貴方、夫は昨夜なんでしたか？」

學士「其様さ、昨夜の事さ。寸断に破裂してしまつて、夫から其れを海中へ棄放て了つたのさ。其的を浪と風とで段々と沖の方へ持て行く——見て居る中に沈んで了ふ！丁度僕が墮落する様に——」

検事の妻 (學士に向ひ)「貴方！此事は自分の兒を貴方に殺されたと同様に、私、一生涯忘れやしませんわ！」

學士「お前の云ふ通りだ！眞實、お互ひの兒を殺したと同様だ！」

検事の妻「ですけれど——何うして貴方はまあ——其様——其様残酷な——私だつて書物を作へるに付ちや——」

夫人 (殆ど、聞こえ難き低音にて)「あゝ！——書籍は——」  
検事の妻 (激しく吐息して)「あゝ！もう駄目ですわね！——私

もうお暇しませう！」

夫人「あの、貴方は、此市から他へ行くんぢや無いんでせう？」

検事の妻「あゝ！私もう何うして可いやら、自身にさえ一向不可解いんでございます。目前は萬事暗夜で御座います！」  
検事の妻は愁然として、廊下の口より出で去る。

夫人（立上がり、暫時して）「貴方！彼婦人を送つて上げないの？」

學士「送つて——僕がですか？——設し彼婦人と連立つて戸外へでも出やうもんなら、世間ぢや彼婦人の事をまあ何て云ふでせう！」

夫人「世間で？勿論私は昨夜何様事があつたのか知らないん

ですけれど、ですけれど——とても、回復は付かないんですか？」

學士「否、何も昨夜の出来事のみに限つた話ぢや無いんです。白状すると、奥さん！僕はもう、今後、あんな風に暮して行く勇氣は無いんです——もう出来んです。——生々の快樂をするつてい勇氣と世間に反抗して行く勇氣とは、彼婦人が全然僕から取捨てちやつたんです！」

夫人（獨言の様に）「へえゝ！すると、彼様小つぼけな砂糖屋さんでも、人の一生の運命を自由にする事が出来るものと見えるのね（學士を視やりて）ですけれど、貴方、まあ何うして、彼様風に邪険に彼様婦人を放棄して了まつたんです？」



學士「あゝ！邪険に見えますか？」

夫人「だつて、あんなに長年月間、彼婦人の心中を苦めた物を平氣な顔をして、寸断に破裂つちまうなんて、夫が邪険ぢや無いんですか？」

學士「奥さん！貴方丈に眞實の事を白狀するとね——」

夫人「眞實の事？」

學士「えゝ、併しお話する前に一言誓て下さい。——決して決して、これからお話する事を彼婦人には話さんて——」

夫人「えゝ、誓て云ひません——」

學士「可しい！ぢやお話ませう。實は只今、茲で貴方との婦人に云つたのは全狀虚なんです。」

夫人「え、虚言！——あの原稿の事は？」

學士「えゝ、僕はあの原稿を寸断に引裂ちや了はしたのでした。又其物を海中なんぞへ棄てちや了はしたのでした。」

夫人「ぢや——ぢや、彼書物は何處にあるんです？」

學士「何處に？何處につて、彼稿は同様僕が引裂て了つたんさ——實際にや引裂ちや了はんだが、所詮同様な事を爲

たんさ！」

夫人「ふん！私、貴方の云ふ事は一向領解ないわ！」

學士「ね、奥さん！先刻、彼婦人が云つたでせう——僕が彼原稿を引裂て了つたのは、結局、彼婦人の兒を殺害たも同

然だつて——？」

夫人「えゝ、彼婦人は左様云ひましたよ。」

學士「だがね、自分の兒を殺害のは、何も父親の所業としち、

や、一番最悪事ぢや無いんです。」

夫人「——一番悪い事ぢや無いんですつて？」

學士「え、實は其一番悪い所業を彼婦人に聞かせるのが可厭に、先刻の様な事を云つたんです。」

夫人「さうして、其一番悪い所業ていのは何う云ふんです？」

學士「今話しますから——まあ聽て下さい。——一つ比喩で

云つて見ると斯うです。——茲にさる男があつて、此男が

一晚大放蕩をした結局、家へ還て來て、女房に向て云ふに

は、實は昨夜は之々云々の所へ行つた——遂兒子迄一緒に

連て行つた——所が、何うした機會か、連れてつた兒子を

迷子にしてつた——何ら苦心して種々尋探して見ても見附

らん、何處の何奴が攫て行つたか——又悪戯をしたのやら

何うしても不解らんのだと——」

夫人「あゝ！ですけれど——ですけれど、夫と是とは相違ふ

わ——是は高が一冊の書物ぢやありませんか？」

學士「否、高が一冊の書物ぢや無いんだ——彼原稿にや、あ

の婦人の精神が入て居るんだ！」

夫人「あゝ、領解りました！」

學士「ね、だから、今後はもう、僕と彼婦人との間には、

希望も無けりや——」

夫人「さうして、貴方は今後何うなさる心算？」

學士「何うする？何も斯も無いんです——只何とかして、こ

の身體の結末を付けたいと思ふ許りさ——何でも早い方が

可い——」

夫人（學士に倚添て）「一寸、よくお聴きなさいよ——何とか  
可い具合に、花々しく仕末が附きたいものね？」

學士「——花々しくつて（微笑みて）よく貴方が冷笑したや  
うに、葡萄の葉を頭腦へ載せてかね？」

夫人「冗談でせう！——私、もう、く——其様下らん事は想  
はないわ——だけれど、同様、花々しくね——生涯に只一  
度だわ——ちや、之がお別れですね——さあ行らつしやい  
よ——何卒、二度と再び来ない様に——」

學士「や、も邪魔をした、左様なら！主人に宜敷云つて下さ  
い——」

學士は立ち去らんとす。

夫人「一寸、お待ちなさいつてば、一つ紀念に上たい物があ  
るから——」

夫人は小机の傍に行き、引出を開け、短銃の匣を取出し、  
蓋を啓らき、其一個を探り出し、學士の傍に来たる。

學士（疑と夫人を視注め）「是が——是が紀念の標徴？」

夫人（徐に領づきて）「貴方紀念て居なくつて——是をさ——  
一度貴方を目的つた品をさ——」

學士「彼時、銃殺て下さりや可かつたに——」

夫人「一寸！——ね、自身で今お使用なさいよ！」

學士（短銃を受取り、之を胸部の隠に納め）「有難！」

夫人「花々しくですよ！——屹度ですよ！——」

學士「ちや左様なら——」  
學士は廊下口より出で去る。夫人は暫時。戸口に佇み、學

士の立去りしを確め、書机の傍に行き、原稿の入れたる包を取り出し、之を破り、原稿を取り出し、見やりながら一枚一枚繰り広げる。やがて其れを携へ、暖爐の側なる腕掛椅子に坐を占め、原稿を膝の上に乗せ、暖爐の蓋を開け、原稿の一部を其裡に投ず。

夫人「一寸、縮頭髪の奥さん！見て被居しやい！——今御前さんの兒を焚殺すから！（原稿の残れる部分を火中に投ず）——御前さんと學士と二人の間に出来た兒を焚殺して了ふから！——」

(幕)

四幕目 主人の住居

黄昏。室内暗黒。背後の室は、小さき卓の上なる釣洋燈に火點しあるを以て明るし。玻璃戸には窓帷かゝれり。夫人は喪服を着、暗き座敷の裡を彼方此方と歩き居る。廳で背後の室へ行き、左手に入る。ピアノの音聞ゆ。間もなく又た背後の室へ出で來たり、夫より座敷に入り來たる。下婢、右手の入口より洋燈を持ち出で來たり、背後の室を通りて座敷に入り、洋燈を座牀の前なる卓の上に置く。其雙眸は赤く泣腫らし、帽子(下婢の常に被れる)には、黒きリボンを結べり。注意して秘やかに、右手の口より出で去る。夫人は玻璃戸の側に立寄り、窓帷を少しく啓けて、暗黒なる外面を眺む。

間もなく、伯母廊下の口より入り來たる。喪服、帽子を被

り、面紗にて面を蔽ふ。夫人は従來の冷淡なる舉動に引反  
て、温情を籠め、手を差延して之を出で迎ふ。

伯母「おや、御免なさいよ、斯う云ふ服装でね——たうく  
妹も目を眠つたもんだから！」

夫人「私はもう存じて居るんです（と自分の服装を領て見や  
り）先刻主人から通知して参りましたから。」

伯母「あゝ左様、通知せる様にと云つて頼んでは置いたがね、  
でも此家へは——御前さんの許へは、自分で一寸御報知に  
來なければと思つてね——」

夫人「何うも態々ぢや恐れ入りますねえ。」

伯母「噫！今更云つても返らない事だけれど、もう少しの間、  
生きてゝ呉れゝばねえ、丁度御前の許に——あの御目出——」

夫人（伯母の猶何か云はんとするを遮り止めて。）「大變結構な  
御臨終だつたさうでムいますねえ——」  
伯母「あゝ左様だつたよ、眞實に少しの苦痛もなく、極く平  
靜に息を引取つたんだよ。それからね、臨終と云ふ間際に  
主人の顔を視て大層喜んでね！さうして明白とさよをな  
らと云つたよ、おやチヨオチは未だ歸つて來ないの？」  
夫人「はあ、未だ一寸還つて來られんと云つて遣しました。  
だがまあ御懸け遊ばせな。」  
伯母「有難よ！落着いて居たいのだけれどもねえ、何しろ斯  
う云ふ中だから——ほら、棺の裡へ入れたら、それからま  
あ出来る丈奇麗に裝飾をして、御墓の中へ美しくして入れ  
て上げやうと思つて居るから。」

夫人「あの何か私に出来る御用は無くつて！」

伯母「飛んでもない事を！何うして何うして、此家の奥様は凶事に手を出しちや不可なのだよ！凶事は考へても不可ないんだよ。あの——今大切の期だから。」

夫人「ですけれど、人の思想と云ふものは——左様云ふ風に壓抑てゆけないものでしてね——」

伯母（自分の前の言葉を受けて）「眞實に其の通りさ。これが浮世なんだらうね。宅ちや私を始め皆々して妹の經帷衣を縫て居るし、此家ちや又直に裁縫が始るだらうが——あゝ有難い事には——全然相違つた仕立物だから。」

主人廊下の出入口より入り來たる。  
夫人「まあ丁度好かつた事。」

主人「おや伯母様が來て被在やるの？家内と二人切りで？まあ！」

伯母「恰度今お暇しやうとするところさ。さうして私の頼んだ事は總體やつて呉れたらうね？」

主人「えゝ、所が半分以上忘却ちやたんです。ね、伯母様、僕は明朝早く御宅へ行きますから、今日は僕の頭腦が全然顛倒して居ますから——兎ても沈着て考へる事は出來んのです。」

伯母「御前まあ、夫様に落膽してお呉でないよ——身體でも悪るくしては——」

主人「えゝ何ですつて？」

伯母「御前まあ不幸の中でも、泰然として勇氣を持たなくつ

ちや不可(い)けませんよ。ね、出来(で)た事は出来(で)たとして——私(わたくし)の様にね。」

主人「噫(あ)！左様(さ)々々、貴嬢(あなた)は小さい叔母(お)さんの事を考(かん)へて被(お)在(こ)やるんですね？」

夫人「是(こ)から嘸(ま)お悽慘(せいかん)おなりでせうね？」

伯母「あゝ四五(四五)日の間(あひだ)はね、然(しか)し直(ただ)に忘(わす)れる事(こと)が出来(で)るよ。」

小さい叔母(お)さんの室(むろ)も初(は)中(ちゆう)終(しゆう)空(くう)でも居(か)まいから。」

夫人「おや！誰(たれ)か参(ま)るの？」

伯母「噫(あ)！御前(ごまへ)世間(よ)には、病人(びやうにん)もあれば又(また)他(ほか)の引取(ひきと)りて世話(せわ)を爲(な)して遣(や)りたい人(ひと)が幾(いく)人もあ(あ)らねえ——氣(き)の毒(どく)な可(か)哀(あ)相(さう)な人(ひと)が。」

夫人「おや、ぢや貴嬢(あなた)は又(また)夫様(つまさま)厄介物(やくがいぶつ)をお脊込(せきこ)になるの？」

伯母「厄介物(やくがいぶつ)だつて！御前(ごまへ)まあ何(なに)を云(い)ふんです——厄介物(やくがいぶつ)なるんてものは——」

夫人「ですけれど——今(いま)設(た)し全(ぜん)然(ぜん)知(し)らん人(ひと)が来(こ)れば——屹度(きつど)貴嬢(あなた)は——」

伯母「何(なん)んな知(し)らん人(ひと)でも、病人(びやうにん)には直(ただ)に仲善(なかつま)になれるもんなんだよ。それから、私(わたくし)は何か(なに)か夫様(つまさま)云(い)ふ風(ふう)な仕事(しごと)をしなければ居(か)られんのだから——まあ假(かり)に茲(こゝ)の家(うち)にしたところが、彼事(あつち)此事(こゝ)事(こと)、種々(しゆしゆ)な事(こと)が出来(で)て来(こ)ると、そら伯母(お)さんの手助(てすけ)が入(い)り様(よう)な時節(ときせふ)も又(また)あるかも知(し)れんのだから——」

夫人「嗚呼(あ)……後生(ごせい)ですから、宅(うち)の事(こと)丈(だけ)はお被仰(おほつ)ないで下(くだ)さいまし。」

主人「えゝ何(なん)うだい、伯母(お)さんと我々(われら)と三人(さんにん)一(いっ)緒(しょ)に暮(く)したら

——實に愉快だらうな——あの何さへ——」

夫人「あの何さへですつて——？」

主人（周章して）「何あに何でも無い事さ。自然に夫様云ふ都合に甘く運ぶさ——何卒左様成る様に祈るのさ——え？」

伯母「左様だとも左様だとも、まあ悠然二人で話合ふさ（微笑して）それからね、（主人に向ひて）夫人が後でお前にこつ

そり話す事があるかも知れないよ。左様なら、お眠みよ！

佛が待つて居るだらうから、（廊下の口で振り返り）ま、何う

だらう！小さい叔母さんも御前のお父様と同じ様に、私の

家で御目出度なるなんて！」

主人「眞實にね——え、伯母様、不思議ですなあ——え？」

伯母は廊下の口より出で去る。

夫人（冷かに、物咎めする如き眼色して、主人の舉動を打視

り）「小さい叔母様のお逝去りに就いちや、伯母様より貴方

の方が餘程顛倒して御仕舞のね！」

主人「え、僕が？——まあ話すからお聴き。——僕が何とな

くそわくする——落着かないのは、決して叔母様の逝去

つた理由許りぢやないんだ——實は學士の事が心配で心配

で堪らんのだ。」

夫人（急がはしく）「おや彼人が何うかして？」

主人「今日午後に彼を訪ねて、例の原稿は確的と僕の許に預

つてあるつて話して、安神させてやらうと思つたんだ——」

夫人「あら！居ましたか？」

主人「否、居なかつた。だが、少し經過てから、検事の妻君

アラブガ・ダハ

アラブガ・ダハ

アラブガ・ダハ



に會つたら、妻君の云ふには、今朝早く家へ来たさうぢやないか？

夫人「え、貴方が出懸ると、すれ／＼に來ましたよ！」

主人「さうして、あの例の原稿は寸断に破裂て了つたと云つたさうだね——え？」

夫人「え、其通り云ひましたよ。」

主人「ふむ、彼は全然頭腦が混乱になつて仕舞つたんだな。」

さうして、其様具合ぢや、無論御前は、原稿は復して遣りやしなかつたらう——ね危難なもの？」

夫人「え、返しちややりません。」

主人「だが、無論、確的と此家に預つてあると云ふ事は話したらうね？」

夫人「否、(口疾に) 貴方檢事の家に話して？」

主人「否、話さんだつた。だが御前話してやりや可かつたのに。だつてまあ考へて御覽。え、萬一失望の餘、何處へか行つて變死でも爲たら夫れこそ大變だ！さ、あの原稿をお出し！原稿を持てもう一度探して來なくつては、え、何處にあるんだ？」

夫人(冷やかに、身動もせず、肱掛椅子に靠て)「もう私の手にはないんです！」

主人「え、無いつて？そ、そりや何ういふ理由で？」

夫人「焚盡て了つたの——全部とも！」

主人(ハツと叫びて跳上る)「焚盡て了つた！あ、あの學士の原稿を！」

夫人「静になさい！ 勝手へ聽えるぢやありませんか！」

主人「焚盡て了つた！ だつて其様——否、虚偽だ、虚偽だ！

夫様途方も無い事が出来るものか！」

夫人「途方があつても無くつても、焚盡つたには相違ないんです！」

主人「だつて？ 御前まあ、御前の爲た所業が理會るかい？ 他人の紛失物を勝手に其様事を爲るとは？ え、法律に違いた所業ぢやないか？ まあ何てい事を爲ちやたんだ！ 虚言と想ふなら、あの判事さんに聞いて御覽。一切話して呉れるから！」

夫人「貴方！ 判事さんにも、又誰にも話さないのが一番可いんですよ。」

主人「だつて、まあ何して此様可畏事をする様になつたんだ。まあ何して此様事を爲る氣になつたんだ？ まあ何云ふ所因で？ さ、話して御聽せ——え？」

夫人（微く唇頭に浮ぶ冷笑を壓へて）「私や貴方の爲に爲たんです！」

主人「僕の爲にだつて？」

主人「今朝、貴方が歸宅て来て、あの昨夜、原稿を讀んだのを聽たと御話してしたらう——」

主人「うむ、うむ！ 夫れで？」

主人「さうして貴方、聽いた後で、羨ましい——厭な心持がしたと云ふ事を白状なすつたでせう？」

主人「嗚呼、愕いた！ 其様意味に取つたのか？」

夫人「まあ何道にしても、私や貴方が他の人の下に立つと云ふ事が我慢が爲切ないんです。」

主人（半ば疑ひ半ば喜悅の情に堪へずして、聲上げて）「嗚呼！御前夫れは眞實か？御前の云ふのは眞實か？眞實か？——だつて、だつて今迄——夫程迄に僕を愛してゐて呉たと云ふ事は氣が注かんかつたが——まあ！」

夫人「夫れから——恰度可い機會ですから、御話しますがね！（俄に、焦燥つたさうに、話頭を轉じて）否、否——伯母様にお聽きなさい——會得りますから。貴方が得心が出来るやうに話すでせうから。」

主人「噫！大概御前の云ふ事は見當が附いた！（兩手を緊く組合せて）え、眞實——え？」

夫人「其様に大聲をなさるなと云ふに！勝手に聽えると云ふのに！」

主人（喜悅に堪へかね、笑ひ出す）「はゝゝゝ。勝手につて！はゝゝゝ、一寸、何てまあ御前は可愛んだらう！——勝手に、はい、下婢一人限でムいますよ！僕は行って下婢に話して来る。」

夫人（殆んど絶望の様にて、兩手を打振り）「あゝ！私や死んで了うから！私や死んで了うから！」

主人「え、何うしたつて——え？」

夫人（氣を取直し、冷やかに）「貴方！馬鹿々々しいぢやありませんか！」

主人「馬鹿々々しい？あの僕が斯様に喜悅のがか？併し、何

かな、下婢に云つて聞かせる必要もないかな。

夫人「否、お被仰よ！何故止すの？」

主人「否、否、未だ早い！だが、何しろ伯母様丈には話さなければりや。さうして、今迄僕に隠蔽して居た事を打明て呉るならんて！ま、なんて！噫！話したら伯母さんは何なにまお御喜悅だらう！」

夫人「私があゝの貴方の爲に學士の原稿を焚盡て了つたと云ふ事を話すんですか？」

主人「否、夫れもだがね。でも其事は誰にも話ちやならん事だ。でも僕の爲に焚盡て了つたと云ふ情愛は——僕の欣喜は——無論伯母様にもお分配をせんけりや！だが亭主を可愛がる若い女房の情愛ていものは、一般に左様云ふものか

な——え」

夫人「貴方、夫れも又伯母様に聞いて見て御覽なさいな！」

主人「あゝ、今度會つたら聞いて見やう。（落着かぬ様子にて

周囲を視廻し、又疑と考へ込みて）「否——だが——否——

あの原稿は！——だが矢張、學士の事を思ふと畏しくなる

ね！」

検事の妻、序幕と同じ衣裳、帽子と外套を携へ、廊下の

口より入り來たる。

検事の妻（邊がしく挨拶をなし、慌しく物云ふ）「噫、奥様寛

忍して下さいませよ——又御邪魔に上つて！」

夫人「おや、何かおしの？」

主人「え、學士が何うか爲ましたか？」

検事の妻「はい。彼人が飛んでもない災難に出會しやしないかと存じまして——」

夫人（検事の妻の腕を握りて）「噫！左様お想ひなの？」

主人「夫様事が。だが、何うして——何故左様御想ひなの？」

検事の妻「はい。何故と申しますと、私が恰度這入て参りますと、下宿の人達が學士の噂をして居りましたね。嗚呼、貴方！まあ何だか學士に關ちや市中で、夫は——種々な評判をして居るんでムいます！」

主人「や、左様云へば、實は僕も聞いたんです。併し、昨夜は確かに直行に家へ歸て寝たと云ふ事は、僕が保證するんです。まあ何うしたんだらう！」

夫人「左様して、一體まあ下宿では、何な噂をして居るんで

す？

検事の妻「嗚呼！夫れが貴方、確固とした事は寸毫分らないんでムいます。下宿の人達も確固とした事は存じませぬのやら、又——私の這入て参りましたのを見ましたもんですから、話を止めましたのやら、又私から強て訊ねますのも何でムいますもんですから——」

主人（落着ぬ様子にて、座敷の中を彼方此方へ歩みながら）

「だが、御同様に、ねえ、貴方、その御聴になつたと云ふ噂は事實で無い事を祈るんです。」

検事の妻「否、否、私の聞きましたのは、確に學士の事なんでもムいます。左様して、何か病院へ何うとか、斯うとかしたと申す事を聞きましたんです——」

主人 「病院へ？」

夫人 「まさか。其様事つて！」

検事の妻 「嗚呼、私はもう、何ですか彼人の事が甚く心配で堪りません。それから、貴方、學士の宿へ参りまして、訪ねたんでムいます。」

夫人 「貴方、よくまあ、其様思切つた事を被爲たね！」

検事の妻 「はい。外に致方もムいませんもんでしたから！私もう、曖昧模糊の事に我慢が仕切なくなりましたもんですから。」

主人 「さうして宿にも居らんの？——え？」

検事の妻 「はい。夫れから宿の人達も彼人の出先に關ては寸毫存じないのでムいます。何でも昨日午後に出切で歸宿ら

んのなさうでムいます。」

主人 「昨日の午後出切りで？まあ宿の人は何を云つて居るんだらう！」

検事の妻 「嗚呼、屹度何か畏しい災難に出會したんだらうと存じます。他には別に考様も無いんでムいます！」

主人 「え、何うだらう、これから僕が行つて方々訊問て見たら？」

夫人 「貴方、御止しなさい！關涉になると面倒だから！」

判事、帽子を携へ、廊下の口より入り來たる。下婢戸を開け判事を案内し、又戸を閉めて去る。判事は平常に無似氣、嚴肅なる面持、無言にて挨拶す。

主人 「あ。判事さん——貴方でしたか？」

判事「や。無論、今夜は御宅へ來んけりやならぬ要事があつてね。」

主人「あゝ、分りました。伯母から何かお傳言があるんですな。」

判事「あゝ、あるんだ。」

主人「え、何か悲歎消息？」

判事「さ、夫れはまあ聴く人の採り様でね。」

主人「怪訝に堪へざる眼色して判事を視やり」「何か他に出來たんですか？」

判事「左様。出來たんだ。」

夫人「熱心に」「何か心配の事ですか？」

判事「さ、奥様！夫れも又採り様でね。」

検事の妻（自然と高聲になりて）「嗚呼！屹度何か學士に關係

した事でせう！」

判事（輕るく、検事の妻を視やり）「何故其様考へるんです？

多分もう何か御承知なんでせう。」

検事の妻（萎縮して）「否、否！私は何も存じませんが

——ですけれど——」

主人「だが、まあ、じらさんで何だか早く話して下さいな！」

判事「ぢや、御話しやう。さて不幸にも、御同様の知合の學

士は病院へ連れて行かれたよ。さうして、殆んど危篤い左様

だ。」

検事の妻（泣叫ぶ）「おゝ神様！神様！」

主人「病院へ連れて行かれた？左様して、危篤つて？」

夫人 (心ならずも)「あゝ、夫程に早く——」

検事の妻 (啜泣つ)「あゝ、奥様！私と彼人とは口論をして別れたまんまで——」

夫人 (細語)「だが、一寸——しいつ！」

検事の妻 (少しも夫人の言葉に頓着せずして)「私は参ります！息のある中、一目でも！」

判事「いや、其は無駄でせう。面會は許さんでせう。」

検事の妻「ぢや、貴方！話して下さい！何うしたんです？一體まあ——？」

主人「眞實に話して下さい——だが、まさか自分でやつたんぢや——？」

夫人「左様なんですよ。私は屹度自分で決行たんだと思ひま

すわ。」

主人「ヘダ——何うして！御前？」

判事 (凝と夫人の容貌と動作とを視注む)「奥様！不幸にも全然貴方の想像通りなんだ！」

検事の妻「嗚呼！まあ可畏い！」

主人「自分で決行とは！まあ何うだらう！」

夫人「自身でどんと銃撃たんです！」

判事「實際、又其通り！」

検事の妻 (努めて穩にならんとして)「して、貴方、夫れは何日の事なんでムいます？」

判事「今日の午後、三時から四時の間でした。」

主人「だが、一體夫れは何處で決行たんです？」



判事 (少しく躊躇しつゝ)「何處？さ、大方、自分の宿で決行  
たんだらう。」

検事の妻「否、宿ぢやムんすまい。私が宿へ參つて居りまし  
たのが、丁度六時から七時の間でムいましたから。」

判事「左様。ぢや、何處か他處でせう。拙者も確とした事は  
知らんのです。只彼男が左様云ふ状態に居たところを發見  
されたと云ふ事丈を知てる丈です。自分でやつてね——胸  
部を撃たんださうです。」

検事の妻「まあ何うでムいませう！斯様最期を致すやうにな  
りますとは！」

夫人 (判事に向ひて)「ぢや、胸部を撃たんですか？」  
判事「左様——申した通り。」

夫人「ぢや、額ぢやないんですね？」

判事「胸部です——奥様！」

夫人「左様、左様、胸部だつて、矢張好所だわ。」

判事「え、何でげす？」

夫人 (避廻して)「何に——何でも無んです。」

主人「さうして、其の負傷は急所なんですか——え？」

判事「絶対に致命傷です。多分今時分はもう、萬事休すでせ  
う。」

検事の妻「あ、左様でせう、左様でせう、何だか虫が知らせ  
るんです！もう、目を冥りましたでせう！嗚呼！」

主人「ですが——貴方は何處で御聴きになつたんです？」  
判事 (言葉短に)「警察筋から聞たのさ。職分でね——」

夫人 (中ば口中にて)「やつとの事で、立派な所業を！」

主人 (戦慄きて)「ま、何を云ふんだ——驚愕して了あわ！」

夫人「私の云つたのは、斯様云ふ所業には、美と云ふ意味がある」と云つたんです。

判事「へん！奥様！」

主人「美しい事が！馬鹿な事を！」

検事の妻「嗚呼、奥様！斯様不幸な事に何うして、美しい事なんてお被仰られるんです？」

夫人「まあ、御聴きなさい。學士は自身で自身の結末を附けたんです。彼人は其様云ふ事を成就る勇氣を持って居たんです——何うしてもせんければならん事をね——」

検事の妻「否、決して其様云ふ譯で、自殺したんぢや無いん

です。眞實、頭が變になつて、やつたんでムいますよ。」

主人「失望の極、やつたんだ。」

夫人「否、左様ぢやないんです。私は確に知て居るんです。」

検事の妻「否、奥様、異がひます。氣が變になつて、やつたんです。やつぱりあの大事の原稿を寸断に破棄して了ひましたやうに——」

判事 (吃驚として)「え、彼の原稿を？寸断にして了たつて？」

検事の妻「はい。昨夜、破つて了つたんださうでムいます。」

主人 (夫人に私語く)「嗚呼！何うでも此關係は脱れる譯には行かんねえ——」

判事「へむ。そいつは不思議だな。」

主人 (座敷の中を、彼方此方歩みて)「え、まあ學士が斯様風

に此世を去るなんて。さうして、自分の名前を後世に残す  
 事の出来る、あの大著述を棄て仕舞ふなんて——」  
 検事の妻「嗚呼！設し整理が出来て、一緒に完める事が出来  
 さへすりや？」

主人「左様ですとも。夫様事が出来るなら——僕は何事でも  
 して——」

検事の妻「貴方！ひよつとかすると、出来るかも知れませぬ  
 ね。」

主人「え、何うして？」

検事の妻（衣套の裡を探りて）「一寸御覧下さいまし。之は彼  
 人が口述致しました時に用ひました控で、私が内緒で取つ  
 て置いたのでムいます。」

夫人（心もち、検事の妻の傍に近づきて）「嗚呼！」

主人「ぢや、貴方が取ってお置になつたんですか——え？」

検事の妻「はい。茲に持参致して居ります。宅を出ます時に  
 持て参つたんでムいます。さうして以來、衣套の裡に入放  
 にして置たんでムいます。」

主人「あゝ、一寸拜見！」

検事の妻（一個の紙束めきし物を主人に渡す）「ですけれど、  
 御覧の通りの反古同然の物で、初も終りも總體めちやくち  
 やなんでムいます。」

主人「左様ですか。だが何うでせう。此を一番何とかして、  
 物にする事が出来るとなあ——設し御一緒に御相談を爲  
 ながらやつたら、出来さうな物ですがなあ——」

検事の妻「あゝ、何道左様云ふ事に願たいものでムいます。」

主人「乾度甘く行きますせ！甘く行かせて見なくつちやなら

ん筈だ！僕はこの仕事に僕の生涯を捧げる覚悟だ！」

夫人「貴方が？貴方の一生を？」

主人「さ、もう少し確的と云ふと、僕の使用する丈の時をさ。

僕の蒐めた材料の方は當分あゝやつて置くさ。え、會得か

？此丈の仕事をするのは、僕が學士の記憶に對する些少の

心ゆかせだ。」

夫人「左様かも知れませぬね。」

主人（検事の妻に向ひ）「ね、左様云ふ次第ですから、一番御

互に大に奮發しませう。ね、いくら泣いても叫めいても出

來た事は取返しが付きませんからね——え？精々御互に氣

を取直して、さうして——」

検事の妻「はい、はい。私の出來ます丈は、力の限やつて見

る氣でムいます。」

主人「結構。ちや此方へ被入い。まあ何しろ控を見ませう。

え、何處へ坐りませう？此處？否、背後の室が宜いでせう

判事さん一寸失禮！ちや奥様、僕と一緒に此方へ被入い。」

検事の妻「おゝ神様！萬一成就致しまする事ならば。」

主人と検事の妻とは、背後の室へ行く。検事の妻は、帽子

を取り、外套を脱ぎ、之を椅子の上へ置く。二人は釣洋

燈の下なる卓に座を占め、熱心に控を檢閲す。夫人は暖爐

の傍に行きて、其の側なる肱掛椅子に座す。暫時して、判

事夫人の傍に近づく。

夫人（低き調子にて）「嗚呼、判事様！ま、何たる僥倖でせう。學士の歿つたのは！」

判事「僥倖？——え、奥様？左様、實際彼に取つてはね。」

夫人「否、私に取つてはです。ね、僥倖でせう——自分の勝手にあつた所業をこの人生でする事の出來ると云ふ事を知るのはね。ね、何だか意想外神々しい光輝が映すぢやありませんか。」

判事（微晒て）「へん——奥様——」

夫人「あゝ、貴方が被仰らうてい事は分つて居ますよ。何故つて、貴方も矢張り理窟屋の御一人だから——おほゝ、誰かのやうに！」

判事（凝と夫人を視て）「學士は、貴方の白ばつくれになるよ

りも、貴方に取つちや大事な人だつたんでせう。拙者の想像は誤謬でげすかな？」

夫人「私は其様云ふ質問には御返事はしません。私は只彼人が、自分の思つた通りの生活をする勇氣を持って居たと云ふ事丈を存じて居るんです。さうして——このまゝ立派な最期を！其の最期に美しいと云ふ感じが映すんです！ね、立派な力と意志とで以て、この人生の快樂を見棄て了うなんて——未だあの年輩で。」

判事「所が甚だ御氣の毒の次第でござすが、拙者は貴方の空想を破壊せんけりや——」

夫人「空想ですつて？」

判事「話を御聴になると、其の空想を棄て御仕舞にならんけ

りや。」

夫人「夫りや何故です？」

判事「彼は自殺したんぢや無んです——自分勝手に——」

夫人「え、自分勝手にでなくつて？」

判事「左様です。學士の一件は、事實を御話すると、先刻御

話した様な次第ぢやないんです。」

夫人（焦燥で）「夫れぢや、先刻の御話は虚偽！？眞實は？」

判事「檢事の妻君に對して、氣の毒でげしたから、實は少

しく色澤を附けたんでげす。」

夫人「さうして事實は？」

判事「先づ第一に、彼はとうに死で了つたんでげす。」

夫人「病院で？」

判事「左様、からもう夢中でね——」

夫人「さうして、未だ他に——？」

判事「それから、此一件は彼の宿でやつたんぢや無いんでげ

す。」

夫人「然し何處でやつたつて、同様ぢやありませんか？」

判事「所が大相違！事實を御話するとね——彼は撃殺て死に

かゝつて居る所を發見されたんです——あの歌唱者の部屋

の裡で。」

夫人（殆んど跳上らんとせしが、復び椅子にがつくりと坐り

て）「夫れは——夫れは誤謬でせう！今日又彼處へ行く筈が

ありませんもの。」

判事「所が彼は、今日の午後、彼處に居たんです。何か唱歌

者にちよろまかされた品物を取復しに來たと云つてね——  
何かしきりに子供が見えなくなつたとか何とか、没分曉事  
をこてく云つた左様です。」

夫人「嗚呼！」

判事「自分は屹度、あの原稿の事だらうと想つたんです。所  
が、御話だと、あの原稿は自分で破壊て了つたと云ふ譯だ  
から、多分懐中物でせう。」

夫人「屹度、左様なんです。ちや、其處に——部屋の裡に斃  
死て居たんですね。」

判事「え、部屋の裡に。さうして、着物の胸部の衣套の裡  
に使用したピストルがあつたんです。負傷は致命傷でした。」  
夫人「胸部を——ね。」

判事「否——彈丸の中つた所は腸でした。」

夫人「忌々しき面持して、判事の面を視やり」「腸！嗚呼！チ  
ヨツ！忌々しいつたらない、私の手を出す事は、何から何  
迄悉皆から撞着になるんだらう——」

判事「未だ一つあるんでげす。少し斯う變な事がね。」

夫人「何です？夫れは。」

判事「その——彼が持て居たピストルがね——」

夫人「息をも吐かず」「へえ！夫れが——」

判事「彼が屹度盗んだのでせう。」

夫人「跳上りて」「盗んだのですつて！夫れは誤謬です！盗ん  
だのちやありません！」

判事「否、御言葉だが。他に解釋の爲様がないんです。屹度

盗んだに相違なし。しいつ！静かに！」  
主人と検事の妻とは、背後の室の卓を離れて、前の座敷へ入り来る。

主人（兩方の手に控を持ち、妻に向ひて）「おい、僕には、もうあの釣洋燈の下ちや見えなくなつちまつた。え、何うだらう。」

夫人「さ、何うしませう。」

主人「え、御前拘はんか——あの御前の書机を借る事にしちや——何うだらう——え？」

夫人「え、彼處が宜けりや。（口疾に）あ、一寸待つて！今一寸片附けますから！」

主人「何可いよ。御前立んでも可い。あれで結構だよ。」

夫人「否、不可ないんですよ。今私が片附るから。是を彼方へ取つて頂戴、さうしてピアノの上へ乗せて下さいまし。あゝさう！」

夫人は書棚の下より楽譜の數々と一緒に或る品を取出し、之の上へ、又他の楽譜の數々を乗せて、之を隠蔽す。さうして、楽譜と一緒に之を背後の室の左手の方へ持去る。主人は原稿の反古を書机の上へ並らべ、さうして、隅の卓の上なる洋燈を取りて之を書机の上へ置く。主人と検事の妻とは座に著きて、熱心に原稿を檢閲す。夫人は背後の室より出で來たる。

夫人（検事の妻の著せる椅子の背後に停立ち、柔しく検事の妻の頭髪を弄りて）「え、御仕事は捗りますか？」



検事の妻（落膽せし科して、夫人を視上げ）「嗚呼！検査るのに大層骨が折れるんでムいますよ！」

主人「否、何程骨が折ても、やらなければならん。他に方法

は無いらぬだから。さうして、一體、他人の書いた物を完備

ると云ふ事が、一番僕には適して居るんだから。」

夫人は暖爐の側へ行き、其の傍なる座牀に坐す。判事は夫

人の背後に倚添て、肱掛椅子に靠れながら語る。

夫人（私語く）「あのピストルが何とか被仰いましたね？」

判事（柔しく）「え、彼が盗んだに相違ないと云つたんです。」

夫人「ぢや、何故盗んだんでせう？」

判事「何故？と云つて他に説明の爲方がないんでごすからな。」

夫人「嗚呼、眞實に！」

判事（夫人の面を凝と視やり）「無論、學士は今朝此家へ來た

んですな。左様ぢや無いんですか？」

夫人「はあ。」

判事「貴方と只二人切りでしたか？」

夫人「はあ。一寸の間。」

判事「學士が此座敷に居る中、貴方は他の座敷へ御出でし

たか？」

夫人「否。」

判事「まあよく考へて御覽。一寸の間も此の室を立ちません

でしたか？」

夫人「はあ左様ね。一寸——廊下へ出たかも知れませんでした。

た。」

アラブが・ダへ

判事 「さうして其時、ピストルの匣は何處にあつたんです？」

夫人 「彼は——え」と——」

判事 「え、何處？」

夫人 「え、あの——書机の上へ置いてあつたんです。」

判事 「其處で、貴方は彼が去つた後で、其の匣を検めて御覽

でしたか？」

夫人 「否。」

判事 「うむ。其必要は無いんだ。自分は學士の持て居つたピ  
ストルを看たんです。さうして、昨日から——否、其前か  
ら確固と知つて居つたんです。」

夫人 「貴方、其ピストルを今御持参ですか？」

判事 「否。警察署に保管して在るんでげす。」

夫人 「警察署ぢや其ピストルを何うするんでせう？」

判事 「誰が其の實際の持主であるかを調査るんでせう。」

夫人 「夫れが分るでせうか？」

判事 「夫人の肩へ倚懸りて私語く」「否！おいへダ——俺が

口を利かん限りは、分りつこなしさ！」

夫人 「驚愕で、判事を覗やり」「夫れで設し貴方が辯べると、

何うして？」

判事 「肩を揺りて」「ピストルは盗品だと云ふ説が行はれるの  
さ。」

夫人 「覺悟せし様にて」「一層死んで了つた方が！」

判事 「微洒て」「誰も云ふ奴だが——さて、する者も、ないつ  
て！」

アラブが・ダへ

夫人（判事の言葉に答へずして）「さうして、設し、ピストルが盗物でなくつて、その持主が分つた時には、——何うなるの？」

判事「左様——一騒動持上るね。」

夫人「え、騒動が？」

判事「左様。貴方の死ぬ程嫌ひな騒動がさ。無論、貴方は裁判所へ召喚される。例の赤い頭髪の唱歌者も一緒にさ。其處で、唱歌者は、一應當時の顛末を陳述せんけりやならんね。え、宜うござるか、其の彈丸の發したのが、無心みであつたか又故意であつたかと云ふ事を訊問られる。或は彼が唱歌者を撃たうとして、衣套からピストルを出さうとしたのか。それで彈丸が發したのか？或は女の方で、彼の手か

らピストルをもぎ取つて、彼を撃殺てから、又前の様にピストルを、衣套の中へ入れて置いたか？或は左様かも知れんのだ——と云ふ理由は、其唱歌者の女と云ふ奴が、滅法強い大女だから。」

夫人「ですけれど、其様醜汚ことは私に關係した事ぢやないわ。」

判事「無論の話さ。併し是丈の質問には答辯せんけりやならんね——何故、貴方は學士にピストルを遣つたか——左様して。設し遣つたとすると、裁判所ぢやまあ何う云ふ判決を作るだらう？」

夫人（挽首て）「夫れは左様ね。左様云ふ事に氣が着かなかつたわ！」

判事「併し、別に心配をする事は無いんでげす——自分が沈黙を守る限りは。」

夫人「判事を視上げて」「すると、私は貴方の任意なのね。今日からと云ふもの、私は貴方に手も足も束縛されて了つたのね。」

判事「柔さしく私語く」「おい、可愛人！大丈夫だよ。俺は自分の地位を亂用しはせんから。」

夫人「夫れでも、矢張貴方の好自由の體ね！貴方の好自由にされるのね！嗚呼畜生！（焦燥氣味にて立上り）「否、考へてでさへ、私は其様事は我慢が出来ないわ！死んでも！」

判事「半ば嘲弄風にて、夫人を視やり）「左様せんけりやならん事にや、直きに慣るさ。」

夫人「判事を視返して）「左様。ひよつとかすると。（書机の側へ行く。意ならざる酒を抑へ。主人の調子を摸擬て）「あの抄取りますか——え？」

主人「大困難！何道半年以上の仕事だ！」

夫人「前の如く）「おやまあ！（柔さしく、検事の妻の頭髪を弄りて）ね、一寸、不思議ぢや無い事？御前さんが、以前に學士と一緒に仕事を爲て居た様に、今主人のと一緒にやつて居るなんて？」

検事の妻「嗚呼、何卒して、學士と同様様に御主人を鼓舞激勵事が出来ますとね。」

夫人「あゝ、追々に其様なる事よ。」

主人「實際左様だ。何となく僕も其様精神がして來たよ。だ

が、まあ彼方へ行つて、判事さんと話してお出で。」

夫人「何か私に補助られる用は無くつて？」

主人「あゝ、何にも無いよ。(振顧りて)え、判事さん、後生ですから、家内の相手をしてやつて下さい。」

判事(夫人の面を凝と視やり)「大恐悦でげす。」

夫人「有難！ですけれど、私今夜は疲勞て居るの。私奥へ行つて暫時の間ソファの上へ横になつて來ますよ。」

主人「あゝ、左様お爲よ——え？」

夫人は背後の室へ行き、前の座敷とを限る帷を垂れる。暫時の後、騒々しき舞踏曲を奏する音聞ゆ。

検事の妻(椅子を離れて)「まあ！何でせう？」

主人(急ぎて、戸口へ行き)「一寸、今夜だけ、其様舞踏曲は

奏かんでくれ！ね、叔母様の事もあるし、又學士の事もあ

るから！」

夫人(帷の間より面を表して)「夫れから、大きい伯母さんの事もね——又衆人の事もありますからね。静にするわ。」(再び帷をもとの如くに垂れる。)

主人(書机に着きて)「屹度家内は、この面倒な仕事を爲て居るのを見るのが嫌なんだらう。え、何うでせう。貴方が伯母の家へ移轉して、さうして、僕が毎晩出懸るとしちや。

ね、左様すると、御一緒に仕事が出来ますが——え？」

検事の妻「はい。多分夫れが一番宜敷ので御座いませう。」

夫人(背後の室にて)「聞えましたよ。ですけれど、私一人茲にのこつて何うしませう？」

主人 (原稿の反古を摺みて)「あゝ、判事様は御親切だから、  
お願したら屹度見廻つて下さるよ。」

判事 (肱掛椅子に靠れ。快活なる調子にて)「無論さ。大恐悦  
で来るよ、ねえ、奥様！御互に二人切で非常に愉快にやら  
うじやごわせんか？」

夫人 (明確とした調子にて)「はあ、御希望通りぢや無くつ  
て？舞臺の立物としてね——」

背後の室にて、ピストルを放ちし音聞ゆ。主人、検事の妻  
及び判事は跳上る。

主人「嗚呼、又ピストルを戯弄て居る！」

主人は帷をおし開け、室内に駆入る。検事の妻續て入る。  
夫人の屍ソファの上に横たはる。擾亂と喧騒。下婢左手の

戸口より入り來たる。

主人 (判事を叫喚す)「自分で撃殺た！——額を撃殺た！ま、  
何うだらう！」

判事 (肱掛椅子に坐し、殆んど、喪神せんとして)「だつて、  
——世間の人は其様事をするもんぢやないがなあ！」

(幕、終)

6/4  
100/1

表年作著 ンセブイ

- |      |  |
|------|--|
| 1850 | ナリタカ <sup>1</sup><br>塚の雄英 <sup>1</sup> |
| 1853 | 夜のスンヨヂ・トンセ <sup>1</sup>                |
| 1855 | 臺御のトアラトス、オ <sup>1</sup>                |
| 1856 | 宴酒のグオホルオソ <sup>1</sup>                 |
| 1857 | スンラクイ、リ、フラ、オ <sup>1</sup>              |
| 1858 | 長會諸るけ於にドンラデルヘ <sup>1</sup>             |
| 1862 | みしかおの戀 <sup>1</sup>                    |
| 1864 | 人逆叛 <sup>1</sup>                       |
| 1866 | ドンラッ <sup>1</sup>                      |
| 1867 | トンギ、ヤペ <sup>1</sup>                    |
| 1869 | 團年青 <sup>1</sup>                       |
| 1873 | ンア、リガと帝皇 <sup>1</sup>                  |
| 1877 | 礎の會社 <sup>1</sup>                      |
| 1879 | 家の形人 <sup>1</sup>                      |
| 1881 | 生 再 <sup>1</sup>                       |
| 1882 | 敵の民人 <sup>1</sup>                      |
| 1884 | 鴨 野 <sup>1</sup>                       |
| 1886 | ムルホスマスロ <sup>1</sup>                   |
| 1888 | 人夫のりよ海 <sup>1</sup>                    |
| 1890 | アラブガ、ダヘ <sup>1</sup>                   |
| 1892 | 師築建 <sup>1</sup>                       |
| 1894 | フルオイエきな幼 <sup>1</sup>                  |
| 1896 | ンマクルボ、ルエリブガ、ンヨヂ <sup>1</sup>           |
| 1899 | 日の生蘇 <sup>1</sup>                      |

明治四十二年十一月二十日印刷  
明治四十二年十一月廿四日發行

定價金八拾錢

不許複製  
(付與アラブガ・ダへ)

著者 永 風

發行者 東京市麹町區飯田町六ノ二四  
西 本 波 太

印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八  
山 田 英 二

發行所

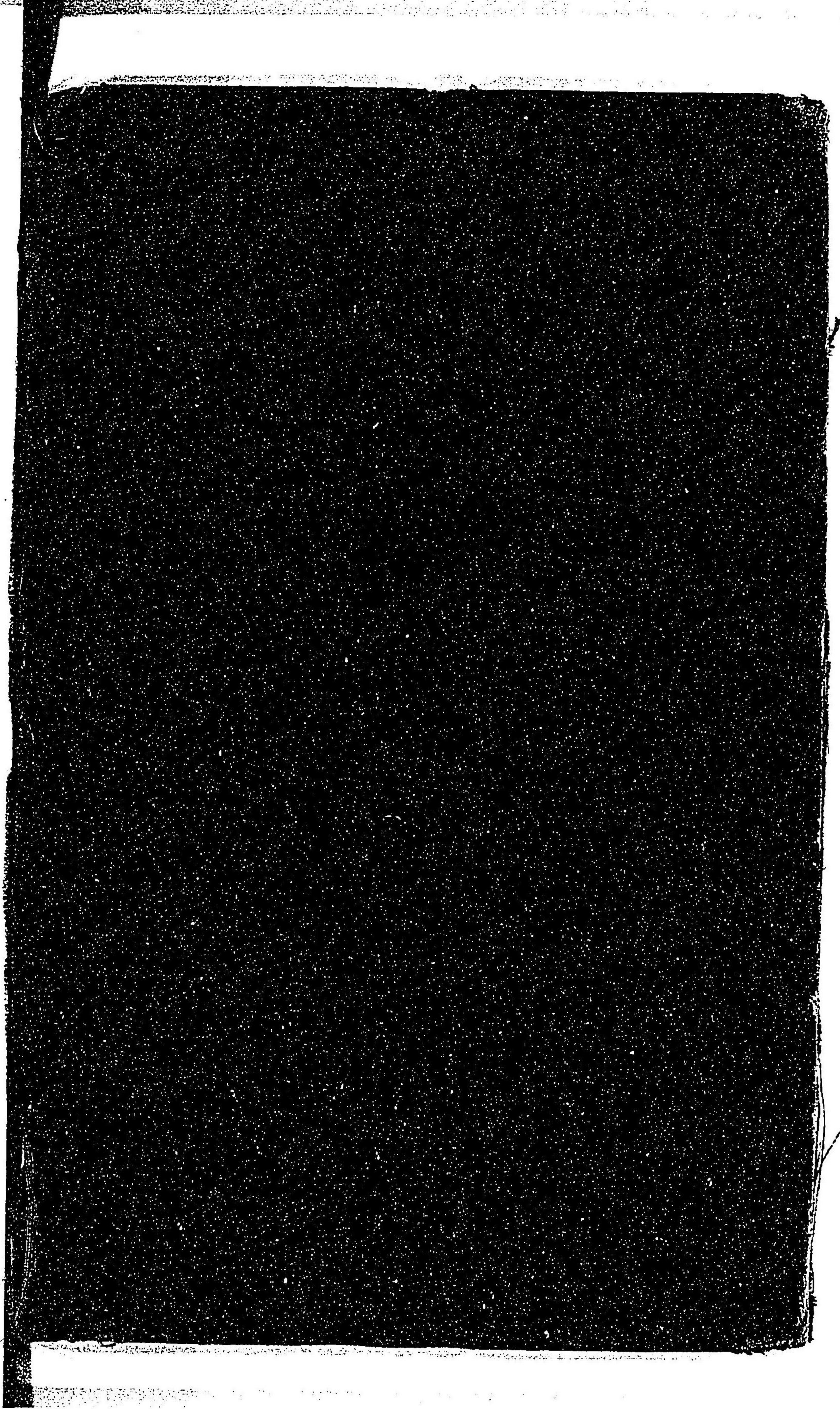
東京市麹町區飯田町六丁目  
(振替口座三〇三四番)

易風社

刷印所刷印館文博



22  
128  
1750





101360-000-0

32-428

ヘダ・ガブラア

イブセン/著

M42

DBY-0693



